
真・恋姫＋無双 転生万屋さん

蓮華草

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双 転生万屋さん

【Nコード】

N9044P

【作者名】

蓮華草

【あらすじ】

恋姫無双の世界に転生した主人公は新しい外史の中でどのような物語を紡いでいくのか？作者はこの作品が処女作の上に、原作を知らない、非常に駄文、更新が遅いなど、ここには書ききれないほどの欠点がございますが温かい目でどうぞよろしくお願いします。

第1話

恋姫無双 転生万屋さん

「あゝ暇だなあゝ、死のうかなあゝ」

いやだってしょうがないじゃん暇なんだもん。

ああ、自己紹介がまだだったな。

俺の名前は、徐庶、字は、元直、て言うんだよろしくな。

特技は……特にないな、俗に言う器用貧乏ていうやつかな、

でも、俺にはすごい秘密があるんだよこれが、

まあお察しの方もいると思うけどとりあえず回想スタート。

く回想く

「あれ…ここはどこだ？」

「ようやく気がついたみたいね」

声がするほうを見てみると綺麗な女性がいました。

どれくらい綺麗かというと、街を歩いたら100人中100人が振り向くであろう美少女だ。

髪はきれいな銀色のロングで、肌は上質な陶器の様に白い。

スタイルも美しく、出るところは出ていて、そうでないところは締まっている。

身長は160前後といったところかな。

多分だけど、オーラとか出てるね、なんか神々しい感じがする。

世界三大美女であるクレオパトラとか楊貴妃も真つ青なほどだ。

まあ、クレオパトラとか見たことないからわからないけどね。

「……………」

おっといけない、考えすぎていたようだ。女性が見てわかるほどイラついている。

いや、顔は笑ってるんだけどなんというか、まあ諸君ならわかってくれると思います。

「そつえば、ここはどこなんですか？」

「ここは、時空の狭間よ、」

「時空の狭間？」

「簡単に言えば神の住む場所、といったところかしら」

…神の住むところか、普通の人が言ったなら、

ハハハ、何言っただよ、頭でも強く打ちつけたのかジョニー、と
いいながら

速攻で119に連絡しているところだろう。

だが、彼女が言つとそれがホントのように聞こえてしまつのがとても不思議だ。

「あなたには、ある世界に行ってもらわね。」

……はい？それって所謂転生ってやつですか？

いろいろな疑問が頭の中をぐるぐる回るが神はそれを整理させる時間をくれなかった。

「いや、ちよつとま

「じゃあね、頑張つてね」

彼女は俺の言葉を見殺して指を鳴らした。

すると突然足元に穴が空き俺は落ちて行つた。

そして時間は進んでいき現在に至る。

〽回想終了〽

「……今思つとたくさん疑問があるんだよねあゝ」

なぜ俺だったのか？、理由はなんなのか？、目的はなんなのか？、疑問は尽きない、けれどもはや知ることはできない。

「…だったら別にいいか、特に問題があるわけでもないし。」

さて、今日はお客さんも来ないし、昼寝でもしますかね。

「……さん、……さん、徐庶さん！」

「………ん？なんだAさんか」

名前を呼ばれたので起きてみるとそこにはAさんがいた。

「だからAさんじゃないって何回言えばわかるのさ」

「まあいいじゃん、みんなそう呼んでるんだからさ」

説明しよう、Aさんとはこちら辺に住んでいるおじいさんである。

Aさんというのは本名ではないがなぜかみんなにはAさんと呼ばれる悲しい人である。

というか、一発キャラなので特に覚える必要はないと思われます。

「ん？なにか失礼なことをかんがえなかったかい？」

「ハハハ、気のせいですよ。ところで何の御用ですか？」

「ああ、畑仕事を頼みたんだけど大丈夫かい？」

「わかりました。いつも道理の仕事で大丈夫ですか？」

「うん、よろしく頼むよ。お代はいつも道理で大丈夫だね？」

「いや、今回はいいですよ、いつも鼻屑にもらってますしね。」

「そうかい？悪いね、じゃあよろしく頼むよ。」

そういうとAさんは帰って行った。

よし、そうと決まればとっとと仕事に行くか。

「杏、仕事行ってくるから、留守番頼むね」

大きな声を出して言う。

「はい、気をつけてね」

2階から元気な声が聞こえた。これだけで3日は不眠不休で頑張れる気がするね。

「いつてきまゝす」

そう言って家を後にした。

ちなみに杏というのは俺の妹みたいな存在なんだけど、

まあこれについてはまた次の機会に話すことにしようかな。

……っていつか俺は誰に話す気なんだろうね？

第2話（前書き）

今日こんな駄作を読んでくれて、そして評価してくださる人がいるの見て

飛び上がって喜びました。

今回も駄文ですが読んでくれると嬉しいです。

第2話

くAさん宅にてく

サクッ、サクッ、サクッ

今俺は、畑をクワで耕してるんだけどさ、

こういう時ってなんかすがすがしい気分になるよね。

土のいい匂いの中で、健全な汗を流す、こういう時間がとても素晴らしい感じるね。

でも、こういう静かな時間のときって昔のこと考えたりしちゃうよね。

く回想く

俺がこの世界で初めて見たのは綺麗な空だった。

排気ガスとかないから風も気持ち良くてずっとこのまま過ごしたい気分だった。

30分ぐらいそのまま居ただけどこのままじゃ飢え死にするって思ってたんだ。

適当に歩いても全然村とか見つからない時は本当に怖かった。とて

も怖かった。

いやビビりとかじゃなくてさ、夜とかすごく暗いんだよ！、明かりなんて全然ないし、

先が全然見えないんだよ

時々犬の遠吠えとか聞こえらるともう怖いとか通り越して死を覚悟したくらいだよ。

それでも、ナント力村にたどり着けたときには大きな声で

「神よ、あなたの慈悲深い行いに感謝します。」って叫んじやったし、

あの時の門番の表情はとても傷ついたね、害虫を見るような眼だったもん。

まあ、それでも優しい人なんだろうね、俺のことを村の中に入れてくれたし、

そして、そのあとに村長さんにあって事情を説明したんだ。

もちろん転生のことは伏せておいたよ、

そんなこと言っちゃったら絶対に泊めてもらえないからね。

設定としては、「自分は、記憶喪失者で、自分の名前すら分からない」ということしたんだ。

そしたら村長さんが、「じゃあ、この家に泊って行きなさい」って
言ってくれたんですよ。

すごくうれしかったね。目から若干の液体がこぼれた位だし、

部屋に案内してもらったあとは疲れてすぐに寝ましたね。

朝に起きると身だしなみを整えるために鏡を見ただけどあれはと
ても驚いたね。

だって俺じゃない子供がうつってるんだもん。

「えっ?!」

たぶん生きた中で最高に驚いた瞬間だったね。

鏡に映る俺は、髪は黒く、肌は健康的な肌色、背は165ぐらいで、
顔は、ブサイクでもなく、美少年でもなく、中の中から中の上くら
いの顔立ち。

年は12〜15くらいだろう。

それが、鏡の中で俺と同じような顔をして驚いている。

腕を動かしてみても鏡の中の少年は同じように動く。

「ん〜ん、……まあいいか、そこまで変な顔でもないし、こっちの
ほうがカッコいいしね」

正直なつちまったもんはしょうがないし、

そう考えると、俺は居間に行くことにした。

居間には、村長さんと女の子が座っていた。

女の子は、10歳くらいで、黒い髪のロングな可愛い女の子だ。

俺のことを不審がっているのか村長さんから離れようとしな

「おはよう、昨日はちゃんと眠れたかの？」

「はい、ありがとうございます」

「はは、礼には及ばないよ。…それと少し話があるんじゃないか
の？」

村長さんは真剣な表情で言ってきた。

なんの話かわからないが、大切な話だというのはわかったので俺も
真剣な顔になる。

「……………」

長い沈黙が続く、家の前には村人達が固唾をのんで見守っている。

「……………」ざわざわ、ざわざわ

…なんだこの空気は?! もしや目か耳を賭けた賭博でもやろうとい
うのか?!

そんなことを考えて身構えていると村長さんが

「…わしの養子にならんかの？」

「……………はい？」

予想外の問いが来たので面をくらってしまったようだ。

「だから養子じゃ養子、お前さんは15かそこいらじゃろうし、身寄りもないんじやろう？だからわしの養子にならんか？」

家の前の観客は冷めたような感じで仕事に向かっていった。

…それにしても、何だったんだあの連中は？

「気持ちはずれいですがいいんですか？もしかしたら、悪人なのかも知れませんよ？」

「ハハハ、悪人がそんなこと言うはずもないだろう」

「まあそうかもしれませんが…」

「それに君が悪人でないのは雰囲気でわかるよ」

………雰囲気ってそんなことわかるのか？

「それとも養子になるのがそんなにいやなのかな？」

村長さんがからかうように言う

「そんなことはありませんが、…その女の子は俺のことを怖がっているようなので…」

「ああ…、杏のことか…、この子は人見知りでな、時期に馴れるじやろっ」

杏ちゃんは困ったような視線で俺と村長さんを交互に見た。

「杏よ、彼をこの家に招きたいと思うのだからいいかの？」

村長さんが優しい声で諭すように言った。

「……………うん、わかった」

小さな声で肯定の言葉を口にした。

「決まりじゃな。」

村長さんは誇らしそうに胸を張ってそう言った。

「…はい、これからよろしくお願いします」

「そんな他人行儀な返事はやめて、そうじゃな…お父さんと呼ぶがいい」

「ハハ…、努力します…」

いきなりそれはハードルが高すぎると思うけどな。

「ああ、君には名前がないんじゃないかな、では、名前をつけなければならぬ……」

そう言いつと村長さんは考える素振りをみせると、

「……よし、決まったぞ。姓はわしたちと同じ徐、名は庶だ。」

徐庶？名前から察するにここは中華系なんだろうか？

「字は……、うむ元直がいいだろう、その字に恥じぬように立派に人生を進むがいい」

…徐庶、字は元直、それが俺のこの世界での名前。

「真名は……自分で考えるのがいいだろう」

……真名ってなんなんだ？

ちなみにこの後、杏ちゃんのことを呼んでしまい。真名の大切さを体に叩きこまれました。

…ていうか、なんでなんな小さな女の子があんなに強いんだよ？！

第2話（後書き）

ちなみにここから数話は過去の話となります。

杏との出会い、そして万屋を作ることにしたきっかけなどを書きたいと思います。

第3話（前書き）

なかなか恋姫達と絡めないのも無理やり入れてみました。
そのせいでいつも駄文なのにさらに駄文になってしまいました。

読んでくれている人に感謝を

第3話

うつかり真名で呼んじゃったので血のお仕置きタイムから早三日。
お仕置きでの傷も癒えてきたところだ。

……というよりあれはお仕置きというよりかは拷問に近かったね。
まず初めに、真名の大切さの講義を5時間。しかも1時間おきにビ
ンタのプレゼントつき。

そのあとに、今の時代の講義を10時間。さらに質問に答えられな
いとパンチサービス。

…まあ、そのおかげで傷とともに知識がついたからいいけどね。

ちなみに、杏ちゃんの名前は徐明というらしい。お仕置きの後に教
えてくれました。

あとわかったことは、どうやらこの世界は三国志の世界の様だ。

徐庶の時点で気付いていたけど確信が持てたよ。

補足として、この村は陳留の北にあるらしく、名産品は牛のお乳だ
そうです。とてもおいしい。

三国志というと魏、呉、蜀の3国で中国の覇権を争う話だったよね。

黄巾の乱から始まり、赤壁の戦い、五丈原の戦いで終わる物語。

戦争をするには兵がいる。その兵は一般市民から徴兵される。

……これは戦争を回避するのは不可能だろうね。

「…はあ、なんとも物騒な世界に送られたもんだね」

「?どうしたの?徐庶?」

「いや、なんでもないよ徐明」

おっといけない、口に出してしまったようだ。

今俺は、徐明と一緒に買い物に来ているんだけど、

「今日は何を食べたい?徐庶?」

「うーん……焼き芋かな。」

「焼き芋って…そんなのでいいの?」

「別になんでもいいよ」

「…適当に言わないでちゃんと考えてよ!」

「…はい」

初日に比べるとホントに話すようになったと思うよね。

このきつかけがあのお仕置きだと思つと受けてよかったって思える

から不思議だね。

「…そんな適当な返事してるとまたお説教するよ?」

「すいませんでした!ちゃんと考えさせていただきます!」

それでも痛いのは嫌だから全力で考えないとね!

「あつ!そういえば昨日のお吸い物がおいしかったからまた作つてよ」

「やっぱり!?、昨日のは自信作だったからね」

嬉しそうに返答してくれた。どうやらこの答えは正解だったようだ。

「じゃあ、材料買ってくるから徐庶はここで待ってて」

そういうと徐明は小走りで店に向かっていった。

「…暇になっちゃったなあ」

かといってそこら辺をぶらぶらするわけにはいかないしなあ、

そんなことを考えながら辺りを見回してみると、

本屋で小さい女の子が高い所にある本を取ろうとして四苦八苦しているのが見えた。

この時代に文字を読める人は少ないから多分あの子は頭が良いのだろう。

でもあの棚の本って確か…、まあいいや、助けに行きますかね。

「うーん、うーん」

可愛らしく背伸びをしながら頑張って取ろうとしている。

「この本を取りたいのかな？」

そう言くと女の子がびくくりした顔をした後にコクンとうなずいた。

……でもこの本ってアダルト本なんだけどなんでこんな小さい子供が必要としてるんだ？

ああ、あれか、兄に買って来いって言われたのかな？だとしたらけしからん奴だな。

いくら恥ずかしいとはいえこんな小さな子供に買ってこさせるとは、男として許せないな。

本を渡すついでに一つ言っておこう

「お嬢ちゃん、こんどお兄ちゃんにこんな本を買って来いって言われてもうんって言っちゃだめだよ。

こういうのも大人の階段の一つだからね。恥ずかしがる暇があるのならまず行動しろって言ってやるんだ。」

うむ、我ながら名台詞だなこれは、

「えっ?!、あっはい、わかりました。」

本を渡してあげると顔を赤くしながら代金を払いに行き、足早に店を出て行った。

「はわわ〜」とか言いながら店を出て行った時には癒されましたね。うん。

…それにしても、

「……………なかなか過激な内容だな。」

これは俺も買うべきなんだろうか？

結局、現場を徐明に見つかり、あえなく御用となりました。

第3話（後書き）

どうでしたかね…やっぱり無理やり過ぎましたかね？
ちなみにあの女の子は孔明ちゃんです。
書き方の指南書がとてもほしい。

第4話（前書き）

今回は少々長めに書いてしまいました。

しかし、今回はなかなか自信作なので自信があります。

読んでくれる人に感謝を

第4話

サクッ、サクッ、サクッ、

突然だけある日、畑を耕していると、あることに気づいてしまった。

なんと俺には、ある能力があることがわかったのだ。

その能力の名前は……… 身体能力の強化だ!!

すごくね、だって特殊能力ですよ？、履歴書とかにもかけるかな？

それも、任意ではなく自動でかかっているらしい。

……… まあ、身体能力の強化といっても微々たるものだけだね。

若干体力が多いとかそんなもんだよ。

とてもじゃないけどこの能力でオレツエー無双とかはできないね。

せいぜい生き延びるのが精いっぱいだろうね。

ん？なんでいまさらそんなことに気が付いたかだって？

それは、畑を耕す時にはクワを使うだろ？

そんなときにさ、全然疲れないんだよね。

その結果、俺には特殊能力があるんだという結論に至った訳ですよ。いや、だってクワとかって重いんですよ？、現代人をなめないでほしいね。

そんなことを考えていると、

「息子よ、仕事は順調かの？」

「…ああ、親父が、うん、順調だよ」

「そうか、それはよかった。じゃあ畑が終わったら杏と一緒に水を汲んできてくれんかの？」

「はいよ」

親父は家の中に入って行つた。

「ふう、さてと、じゃあ俺も行きますかね。」

まずは、徐明を探しにいかないとな。

……ああ、ちなみに親父って村長さんのことね。まあそれは置いておいて、

確か徐明は鶏の世話に行つてたと思うんだけど……まあとりあえず歩くか、

それにしてもこの村はのどかだよな、空気もおいしいし、村の人は

みんな親切だし、

「あれ？確かこのあたりだと思ったんだけどなあ」

俺の頭の地図の中では着いたはずなのだが徐明どころか、鶏1匹みつからない……………

「もしかして迷ったのか？」

「徐庶？、なにしてるの？こんなところで？」

「うお！！？、…なんだ徐明か…」

いつの間にか後ろに徐明がいたようだ。

「…ああそうだ、親父と一緒に水を汲みに行けだってよ」

「わかったわ、じゃあ行きましょう。」

そう言うのと並んで水汲み場へと向かうことにした。

「…それにしても何処に行こうとしていたの？」

「ん？養鶏所だけど？それがどうかしたのか？」

「……………方向が真反対よ」

呆れたように言われてしまった。

水汲み場は村を出て少し行ったところにあり、山のふもとにポンツと井戸があるのが印象的だ。井戸も

滑車タイプではなく、ポンプ式なのもなかなか乙なものである。

ポンプを勢いよく上下させると水が出てくる仕組みになっている。

流れ出る水を見ながら徐明が

「…そういえば、真名はもう決まったの？」と聞いてきた。

真名…その名前を預けた人になら首を切られようとも後悔をしない
って人に預ける大切な名前。許され
てもいないのに真名を勝手に呼んでしまったら死罪でも可笑しくな
いらしい。

「…まだ決まってるじゃないよ。なかなか難しいものだよね、なんという
かしっくりこないんだよね。」

「そう…」

「まあ、いつか決まるだろうからその時になったらすぐに教えるよ」

「…フッフ、楽しみに待ってるから早く決めてね」

一瞬キョトンと顔をした後に、笑顔になった。やっぱり綺麗な子は
笑顔が一番だよ。

しかし、この幸せは長くは続かなかった。

村の手前で俺たちが見たのは地獄だった。炎を中を逃げ惑う人々、その中には賊も交じっているのか殺

戮を行っている。村を出る前の長閑さはなく、まさに阿鼻叫喚な空間だった。

「っ！お父さん！！」徐明が走って行く。俺も急いで駆け付けた。

「ああ……お前たちが……」

親父は、賊にやられたのか大きな切り傷があった。

「お父さん?!大丈夫?!」

「……わしはもう駄目じゃろうな……、だから、……お前たちは早く逃げなさい。」

「何言つてんだよ!?弱音吐いてるんじゃないよ!!」

「そうだよ、はやく一緒に逃げよう?」

「……子供達よ、わかるじゃろう?この命が消えかかっているのが……簡単なことじゃ、お前たちが

ここからわしを連れ出したとしてもわしは胸の傷で死ぬじゃろう。

……ならばお前たちだけで逃げるのが一番だと……」

「でも……」

「いいからさっさといかんか!!、年寄りの最後の頼みくらい聞き届けい!……!」

強い声で親父が言う、自分は長くないから置いて行けと……ならば俺は息子として、

「……それが……最後の願いなんだな親父?」

「……そうじゃ、悪いのう、……こんなことを強要してしまったの」

死の淵でも親父はいつも道理にふるまってる、だったなら俺も倣うのが礼儀だろう。

「……いくぞ徐明、親父の頼み事だ、聞いてやらないといけないだろう。」

「でも……」

徐明は親父から離れようとしな……目には涙をにじませている。

「……杏よ、わしは長く……幸せに生きた……じゃからもういいのじゃ……」

「お前たちは若い……、じゃから生きなければならぬ。」

親父があやすように言う

「お父さん……、うん……わかった。ありがとう。」

「親父……今までありがとな、とても楽しかったぜ。」

「ハハハハハ、そうかそうか……それは良かった。ではな……達者に暮らすが良い。」

親父から離れる。とても悲しくて、悔しい……、

丘の上で村の最後をみた、炎に包まれ全焼し、賊達は食料や財貨を片手に意気揚々と去っていく。

……すべてが燃えた……家も幸せも……親父も……すべて賊達が奪い去って行った。

……もつと力がほしい……大切なものを守れる力を……二度と失わないように……

「……徐明……決まったよ、……俺の真名は護守^{さねもり}、これからは……絶対に大切なものを護るよ……だから受け取って欲しいんだ。」

これは誓いの言葉……俺の人生の目標……

「……うん……受け取るよ、私の真名は杏、これからよろしくね、護守」

「ああ…よろしくな、杏」

お互い不格好な笑い顔だったけど、幸先としてはまあまあだと思った。

こうして、たくさんものを失った代わりに真名と、絶対に守りたいものが出来た。

第4話（後書き）

どうだったでしょうか？…やはり駄文でしたね。

今回は主人公の真名と決意を書いてみました。

次回は修行にでたり、万屋を開店させると思います。

第5話（前書き）

今回は陳留で拠点ゲットなお話です。

読んでくれる人に感謝を

第5話

俺たちは村を一望できる丘で今後のことについて話し合っていた。

「それで…これからどうするつもりなの？」

「…とりあえず、陳留に行こう。あそこは大きい街だから仕事もあるだろうし」

「じゃあ、早く行こう…、あんまりここにいたくないし…」

急かすように杏が言う、…まあ無理もないけどね、

村を一望できるといっても今や、焼け跡しか残ってないし…

俺たちは村に別れを告げたあと、陳留へと向かった。

「それにしても大きい街だな」

「洛陽にも近いからね、交通の便もいいし」

「こんだけ大きいと仕事也多そうだな」

期待に胸を躍らせてそう言つと杏が、

「…そのことなんだけど、私たちのこと雇ってくれる人がいるのかな？」

「？なんで？」

「だって私たちまだ10歳と13歳だよ？、雇ってくれないと思うんだけど…」

…すっかり忘れていた…、

…やばいな…いくら大人びてるとはいつてもまだ15にも達してないんじゃない門前払いだ。

「俺は元大人の転生者なんです！」って言っても信じてもらえんだらうし、

多分病院行きだろう。今の俺に出来ることは…

「まあ、とりあえず行動してみないとわからないから早く行動しようか？」

現実逃避だけである。

「うーん…君いくつなの？えっ？13歳？無理無理せめて17くらいじゃないと…」

失敗。

「いいけど年は？17歳？嘘言わないでくれよ。せいぜい15かそこいらだろう？」

失敗。

「君たちの年齢はいくつなの？え！？13歳と10歳？！……………すばらしい、君たち僕のところでは働かない？お金ならたっぷりあるからさ、ハアハア……………」

逮捕。

「どうするの護守？、働けもしないし泊る場所もないけど？」

「……………今考えてる……………」

まずいな、ここまで年齢の壁が厚かったとは…、最後の野郎はただのロリコンだったし、

…やっぱり俺だけでも奴のところでは働いたほうがよかったかな？

……………いや、俺にはそんな趣味もないし許容すらできない！！しかし、どうするか……………、

やっぱり今からでも奴のところに行つて……………

「すいません、すこしいですか？」

そんな腐った考え事をしていると女の人の声が聞こえ我に返った。

「どうかしましたか？」

杏が受け答えをする。

「えっと…大事な首飾りを無くしてしまったんですけど一緒に探してくれませんか？」

女の人が心底困ったように言った。

「もちろんです、任せてください！」

杏がやけ張り切って答えた。

「…杏、なんでそんなにやる気なの？」

「決まってるじゃない、大事な首飾りよ？そんなの恋人からの贈り物に違いないわ！」

「…いや…そんな理由で？」

「そんなって何よ？！女の子には大切なことなのよ！！」

俺の肩をぐわんぐわん揺らしながら耳元で大声で言う。

「わかったからそんなに揺らさないでくれ！、あと耳が痛いからもうすこし離れてくれ！」

「あつ、ごめんね、それで何処で無くしたんですか？」

「えっと…多分市場だと思います。」

「市場ですか…それは一人じゃ大変ですね。早く探しましょう。ほら！行くわよ護守！」

「わかったから引つ張らないでくれ」

「フフ、ありがとうございます」

「あつた！！、これじゃないですか？！」

杏が泥だらけになりながら探しだしたらしい。手には確かに綺麗な首飾りが握られていた。

「ああこれです！ありがとうございます！」

女の人が嬉しそうに声を上げる。

「何かお礼をしないといけませんね……、」

その時、杏の目が光ったのを俺は見逃さなかった。

「ええと、それじゃあ私たちは家がないので泊めてもらえると助かるんですが……」

「そんなことでいいんですしたら是非来てください。」

「「ありがとうございます」」

「「じゃあついてきてください」」

そう言うと女の人は歩きだした。

それを確認すると杏が小さな声で、「計画通り」と言っていたのは驚いたよ。

さらに晩食の時に相手がお金持ちだと聞くと俺達の身の上話を餌に空き家をいただいた時には驚きを通り越して恐怖に変わったね。

ちなみに悲しくないのか？と聞いてみると、「それはそれ、これはこれ」なんだそうだ。

こうして俺達は陳留での拠点を手に入れ、今回のことに味をしめた俺達は万屋を開店させたのだ。

第5話（後書き）

なんだかグダグダでしたね、もっとうまく書けるようになりたいです。

なんだか杏のキャラが定まらない…

第6話（前書き）

そろそろ過去編も終わりに近づいてきました。早く恋姫たちと絡ませたいです。

読んでくれる人に感謝を。

第6話

「おゝい、坊主、田植えを手伝ってほしいんだが」

「了解しました、料金はこちらになります」

「はいよ、じゃあついてきてくれ」

「杏ゝ、ちょっと仕事いつてくるなあゝ」

「いつてらっしゃゝい」

万屋を開店して1年、俺達もこの街に馴染んできた。

万屋もそこその知名度になったし、これは幸運の女神様でもついでくれたのかね？

「ふう…終わりましたよ」

「そうか、お疲れ様」

「またのご利用お待ちしておりますね」

じゃあ、さつさと家に帰りますか…

「ただいまゝ」

「おかえり、あと仕事の一つ来てたよ」

「仕事の内容は？」

「喧嘩の仲裁だつて」

「うーん…面倒だけど行ってくるわ。場所は？」

「市場だつて…本当にいくの？」

「依頼されたらしょうがないでしょう、じゃあ行ってくるわ」

「気をつけてね」

さてと、市場に急ぐかな…

市場に来てみると人ばかりができていてその真ん中で男二人が睨み合っていた。

「万屋さんですか？」

「…そうですね…依頼主さんですか？」

「はい、依頼したのは私です、このままじゃ商売にならないので…」

確かにあんなのが居たんじゃ商売にならないよな、

「じゃあ料金はこの程度でどうですか？」

「はい…よろしくお願いします…」

料金ももらったし、いっちょやりますか！

「はい、すいませ〜ん、通してください〜い」

人だかりを抜けると汚い言葉を吐きながらつかみ合ってる奴らが居た。

「てめえー！ただで済むと思うなよ！こらあー！」

「そつちこそがたがたぬかしてねえでさっさとこいやあー！」

面倒くさい、とても面倒くさい。あーもうめんどくさい。とりあえず事情を聞くか…

「おーい、お前たち、なんで喧嘩なんかしてるんだ？」

「目があつたら戦いは避けられないんだよ！！」

2人同時に答える、実は仲よしだろお前ら……それに目があつたらつて何処の番長だよ…

「皆さんの迷惑なのでやめなさい」

「ああ〜！お前俺たちに説教する気かあ〜？上等じゃねえか！お前からやってやるよ！」

また同時に答えてきた…ホントに仲がいいな？

二人が同時に殴りかかってくる。だが！

「「があっ！！」」

二人の拳を避けて腹に一発ずつお見舞いしていく。

これでもあの事件からずっと武術の稽古をしていた俺には通用しないぜ！！なにせ師匠に

「お主は防御に関しては一流じゃが、攻撃に関しては…へっぼこじやな」

って言われたくらいだ、…へっぼこ呼ばわりされるのはホントにきつかった…。

そんな俺が攻撃の練習に明け暮れた結果なんと！

「うゝむ……へっぼこの2段階上くらいの腕前かの…」にランクアップした。

まあつまり何が言いたいのかというと、こんな野郎どもに遅れなんてとらないってことさ。

「顔洗って出直してきな！」

決まった……文句なしに決まった…。

「「畜生…覚えてろよ!!」」

二人が仲良く同じ捨て台詞を吐いて逃げていった。

観客から歓声上がる、その中心に俺…。……幸せだ。

「万屋さんですね？仕事の依頼をしたいのですが……。ここではないので私の家にお越しください」

しばらくすると怪しげな小太りの男が寄ってきた。

気分を良くしていた俺は疑いもせず了承してしまった。

……。この時もつと注意してこの男を見ていればあんなことにはならなかっただろう。

第6話（後書き）

次あたりで過去編も終わりを迎えることになるでしょうね。
それにしてもグダグダ過ぎてちゃんと話になっているかが不安です。

第7話（前書き）

過去編終了！

長かった…これからは、たくさん恋姫達と絡ませていきたいと思ひます。

読んでくれる人に感謝を。

第7話

小太りの男の家は豪邸だった。

「すごい家ですね…、お役人ですか？」

「はい、そうです、外で話すのもなんですからお入りください」

家の中は金持ちというよりは成金という単語のほぅがしっくりくる感じだった。

ついていき男がはいって行った部屋は薄暗く、悪人の巢窟というよ
うな部屋だった。

「すみません、急用を思い出したので失礼します！」

ここで俺も事態の危うさを感じ帰ろうとしたのだが男は許さなかつ
た。

「外に私兵を配置させています。出て行った瞬間にゴミとなるでし
よう」

脂ぎった顔をゆがませて歪に笑う。イラつく顔だ……

「……依頼とはなんですか？」

こうなったら、とっとと依頼なんて済ませてここから出てしまおう。

「依頼の内容は……暗殺です」

「は？」

「だから暗殺ですよ、あ・ん・さ・つ」

暗殺？なぜ？いったいどうして俺が？！

「私は今の位に満足していません…、ですから邪魔な人間を排除してもらいたいのです」

「なぜ俺なんですか？、」

「あなたが街で喧嘩を止めたのが眼についたからです」

そんな理由で？！頭が緩い人なのか？

「もちろん報酬は用意しております」

報酬で釣るとは汚らしい…だが俺は殺人狂でもないし受ける理由がない。

「……俺がその依頼を受ける道理がない」

「そうでしょうか？あなたは万屋ですよね？」

「…そうだが、依頼を受けるか受けないかは、こちらに選択権がある」

「そうではなくて、あなたは商売の許可書を持っておりますかな？」

「?!あれがなくても商売はできるはずだ!!」

許可書といっても大半はそんなもの持ってもいないし、役人たちも見逃してきたはずだ。

なにせあれは値段が高すぎる。

「なにをおっしゃっているのですか?あれが無いと駄目に決まっているじゃないですか?」

そう法律で決まっています。醜い笑い顔で続ける。

むかつく…イラつく…汚らわしい…その顔を俺に向けるな…

「どうしても嫌だというなら仕方ありません…逮捕になりますね…」

「なに?」

「私はこれでも罪人を裁く立場の人間なのですよ、刑の強弱すらも決められる…ああ、

あと捕まるときにはあのお嬢さんも一緒ですよ」

「っ?!、きさまあ!」

「いいんですか?そんな言葉を口にしても…」

「ぐう…」

「そう…それでいいのです……、依頼を受けてくれますね?」

勝ち誇ったような顔で問いかける。

殺したい…殺したい…こいつを引き裂いてやりたい…………でも…

「……………依頼の内容は？」

「フッフ、依頼の内容は

」

それ以上に杏を護りたい……………

深夜、

標的の寝室に忍び込む……。音をたてないようにゆっくりと標的に近づく。

標的は最近台頭してきた若い青年で、自分の地位を脅かす危険性があるから消すらしい。

彼は皆の幸せのためにこの道を選んだらしい。

いつも街を警備しているのを見かけている。

街でも評判の良い青年で皆に好かれている。

「すう〜すう〜」

今日も疲れているのだろっ…とても深く眠っている……、

「……ごめん」

そう短く呟き…あいつから渡された短刀でのどを切り裂く……、

血が切り口から噴き出てくる…痛みで起きたのか俺の顔を恨めしそうに睨んでいる。

「……ごめん」

同じ言葉を呟く、それでも彼は俺のことを睨んでいる…無理もな
いか……………。

やがてこと切れたのかぐったりとした……二度と起きることが無く
なった体…

罪悪感で押しつぶされそうになる……胃にあるものをすべて吐き出
したい…

泣きわめきたい……俺の意思じゃないと叫びたい……でも殺したの
は俺、事実是不変。

「……ごめん」

三度目の謝罪……意味のないことだとは分かっているが、言わない
と潰されそうになる。

俺は重い体で急いで部屋から抜け出し、夜の闇に逃げ込んだ。

家に帰ると杏が寝ていた。俺のことを待っていてくれたのだろう……

「……ああ、護守……おかえりって！？どうしたの？！」

起きたばかりの杏が声を張り上げる

「えっ？何か変かな？」

「……わからないの？」

なにかおかしいのだろうか？服は着替えたし、血はついてないはずなんだが……

「あなた……泣いてるわよ……」

「あっ」

触ってみると確かにほほには涙が流れていた。……こんなことにも気付かないなんて……

「なんでもないよ……ちょっと眼にゴミが」

言い終わる前に杏が抱きしめてきた。

「馬鹿にしてるの？……なにかあったんでしょ？話さないよ……」

……杏は俺を抱きしめながら心配そうに聞いてくる……

杏の体温が暖かくて……安心して……全部話しそうになる……でも
言えない。

「杏……大丈夫だよ……心配しなくても……」

「私ってそんなに信用ならないの？」

「えっ？」

「たった1年ほどの仲だけど私たちは家族なのよ？それなのに護守
は私を信頼しないで一人で抱え込も
うとしてる！それって信用がないってことでしょう？！」

「違うよ杏、俺はただ……」

「ただなに？心配かけたくないっていうの？」

それもある……ただ……

「怖いんだよ……」

「えっ？」

このことを話したら杏が俺のことを軽蔑しそうで……

「……大丈夫、私は絶対にあなたのことを嫌いにならないわ」

「なんでそんなこと……」

「さっきも言っただけど私たちは家族なのよ、私は護守のことを信頼してる。どんなことがあってもそれなりの理由があるって信じてるから……」

強い口調ではつきりと言う、ハハ、妹に慰められるなんて兄として失格だな…

流れる涙は杏に感動したからじゃないぞ、ホントだぞ!!

「わかった…話すよ」

「そう、じゃあ話して」

「その前に離れてくれないかな？」

ここまでずっと俺は抱きしめられたままなのである。確かに心地いいけど兄としてはね…

「ああ、ごめんなさい」

そう言って離れる…もうちょっと恥ずかしがるとかそういうのはないのかねえ。

そのあと俺はすべてのことを話した、杏は俺のことをものすごく叱

った後に許してくれた。

罪が無くなった訳ではないが少しだけ、体が軽くなったような気がした。

「それでこれからどうするの？」

「俺は…あの仕事を続けたほうがいいと思う…」

「でも…」

悲痛な声…俺だっていやだけどさ……

「俺はあいつの裏を知ってしまった…だから俺は消されるかも知れない…」

俺だけでなく杏も消されるかもしれない…

「確かにそうだけど…」

「だから俺には利用価値があることを示し続けなければならない」

それが俺たちの生き残れる道だから…

「護守は大丈夫なの？」

「ありがとな、心配してくれて…」

そう言って杏の頭を撫でてやる。

「なっ？やめてよ？！／＼／」

「なんだよ、赤くやりやがって」

なかなか楽しいなこれ…くせになりそうだ……、そろそろやめるかな…

「……ずいぶん昨日と違うじゃない？」

「昨日の仕返しだよ」

抱きしめられて恥ずかしかったからね…、

朝日が昇って俺達を照らしている。

「おい、腐れ役人、報酬をもらいに来たぞ」

そう言って短刀を返す。

「おや…もう平気なのですか？昨日はあの後泣きながら家に帰ったらしいですが…」

知ってやがったのか？イラつく野郎だ……

「ああ…気持ちの整理は出来た…」

「そうですか……こちらが今回の報酬です。お受け取りください」

もらったのは商売の権利書とあの時使った短刀一本のみ…、皮肉のつもりか？

「これからはどうするのですか？」

いやらしい笑みを浮かべながら腐れ役人が問いかける。

「……………お前たちに消されたらたまらないからな…続けさせてもらうさ…」

もちろん嫌な顔をするのを忘れたりはしない。

「それはよかった…消す手間が省けてよかったです」

腐れ役人も楽しいのか笑っている。

……………今はそうやって優越感に浸ってるがいいさ……………、だがな、飼いだですら主の手を噛むんだ。

俺は、いつか絶対に貴様の喉に噛みついてやるから待っている！！

く回想終了く

第7話（後書き）

護守には潜入する才能があるのです。某蛇並みに…
苦しい言い訳ですね……まあそんなものだと言いつけてもらえると
うれしいです。

第8話（前書き）

おかしい…恋姬たちと絡めるはずがまた遠のいてしまった。
だが次こそは絡めたいと思います。絶対に。

あと途中に電波を受信したためにおかしなところがあります。注意
してください。

読んでくれる人に感謝を

第8話

……………と昔のことを考えすぎていたようだな…もう日が落ちかけてる。

「ふう〜、Aさん、仕事終わったぜ〜」

「だからAさんじゃないと…まあいい、御苦労じゃったな」

「またのご利用お待ちしておりますね」

じゃあ早く帰りますか…

夕暮れの色に満ちた街並みを見ながら考える、

「もう5年か…いろいろあったな…」

陳留に来てもう五年目、俺は18歳になり、杏は15歳になった。

本当にいろいろあったな…、万屋も知名度はものすごいし、

杏は陳留の庶民のアイドル的な存在になったし、

俺自身も役人の上のほうには結構知り合いが増えた、…みんな碌でもない奴らだけど。

なんでも俺は、万屋ではなく、便利屋で通っているらしい。

金さえ払えば邪魔ものを殺してくれる便利な存在。

……たくさんの人を殺してきた… 良い奴も、悪い奴も…、

そのおかげでうちの家計はウハウハだけだな。H A H A H A、

「はあ、いつまでこんなこと続けるんだろうなあ」

陳留の街も廃れてきている、当り前だ… 上の奴らは自分のことしか頭にない奴らだけ。

そんな街が発展するわけがない。まあ… ある意味俺のせいなんだけどさ。

おまけに近頃は黄巾党なるものが出始めてきた……、

黄巾党… 乱世の幕開けに一役買った勢力…、導師の張角が率いる軍勢。

これから世界は戦乱に包まれる、俺はそこでどう行動すればいいのだろうか？

「まあ、なるようになるか…」

別に俺が考えたって世界がどうにかなるわけじゃないし…

そう考えると俺は眼の前の肉まんに注目した。じゅるり。

「ただいま」

「あつさなもり護守、えっと、その…」

杏が珍しく口淀んでいる。なにかあったのだろうか？

「久しぶりですね、徐庶さん」

奥には腐れ役人が居た。畜生…

「……何か用ですか？」

短く、簡潔に質問する。

「決まってるじゃないですか…、仕事の話ですよ」

久しぶりのいやらしい笑み…いつまでたっても馴れないな…

「杏、部屋に入ったほうが」

「ここにいるわ」

あまり聞かせたくない話しただけだね…。気持ちのいい話じゃないし…。

「……それで、仕事の内容は？」

入れ替える…俺が俺じゃなくなる。スイッチを切り替える。

いつもの徐庶のスイッチと、暗殺者の徐庶のスイッチ。…ただの逃げだとはわかってる。

でも、こうでもしないと押しつぶされそうになるからね。

「曹操は知っていますか？」

曹操…三国志の魏の初代君主で、治世の能臣、乱世の奸雄といった名称がつけられた。

まさに時代の風雲児と呼ばれる英雄だろう。

「…名前くらいなら…」

「そうですね…、なら話は早い。その者を始末してほしいのですが」
ぐらりと視界がゆがむ。まだ人を殺すことを馴れないようだ。

「ちょっと…大丈夫？」

顔色が悪いのだろう。杏が心配そうにのぞきこんでくる。

「ああ、大丈夫だよ」

「それで…お返事は？」

やけに答えをせかしてくる。

「…返事の前になぜ曹操を始末したいんだ？焦っているように見えるが？」

俺はこの腐れ役人が焦ったところを見たことがない。

いつも飄々と小馬鹿にして俺に命令するような奴だ。もちろん悪い意味でな。

「…こ奴は時代の英雄、早く除かなければ私より上に立つ人間になるでしょう」

だから殺さなければならない。と続ける。

彼の中では自分の地位がとても大切らしい。それよりも、もっと大切なものがあると思うけどな。

だが、人を見る目はそれなりにあるらしい。曹操を英雄と分かっているみたいだし。

…ここで俺が曹操を殺したらどうなるのだろうか？

歴史が変わるのか？それとも修正力みたいなものが働き失敗するのか？

…もしかしてこれが俺の送られた意味なのか？…わからないな…。

「早く答えてほしいものなんですが？」

「……………受けよう」

「ちょっと?! いいの?!」

「ああ…いままでも受けてきたんだからこいつだけ特別というわけにはいかない」

それもある…だが俺のなかで一番大きい感情は、興味だ。

「それに…すこし興味があるからね」

「興味って?」

「時代の英雄様を殺せるかどうかね…」

…なんかいつになく乗り気なんだけどこれも運命なのかね?

「受けていただけたらと思っていました。今回は潜入のために従者の仕事に空きを作っておいたのでご利用ください」

そう言うのと腐れ役人は帰って行った。

あいつも必死なんだろうな、潜入の用意をしてくれるなんてさ。

外を見てみると真っ暗だ。

「もう暗くなっちゃったし、仕事は明日になるだろうな」

そんな呟き、それに反応したのか杏が、

「ねえ…大丈夫なの?」

「ん？なにが？」

「だから…護守の…心のことよ…」

心配そうに俺のことを見ている。…ああ…ホントにいつも迷惑ばかりかけてるな俺……

「いつも殺した帰りは今にも壊れそうな顔をしてる。…だから、これで最後にして、これ以上やったら護守の心が壊れちゃうわ」

ああ、俺は駄目な兄貴だな…妹を泣かせるなんてな…最低だな…

「わたしはこの街が好き…でも、この街にいるからあんな依頼が来るのなら」

わたしはこの街から出て行ってもいい…だから…」

だからやめると、俺のために好きな街から出て行く覚悟があると言う。

だから、俺は…

辞めない

辞める

「ごめん…俺は…それでも辞められない」

理由なんてない、ただこう答えなければならぬような気がした。
それだけだ。

「っ!!!?この馬鹿兄貴!!!!」

「ぐはっ!!」

杏の渾身の右ストレート、音速を超えた一撃を食らった俺は壁に叩きつけられ、そこで意識を失った。

DEAD END

はっ?!なんだ今の明確なイメージは?!!

だが、わかる!!ここで辞めないを選んだら俺は確実に死ぬ!!!!

だからここは…

辞めない

辞める

「わかった…これが最後の仕事にするよ、約束する」

杏の眼を見て答える。その眼は涙でいっぱいだった。

「うん！ちゃんと約束守ってよね」

杏が涙を流しながら笑みを浮かべる。

それだけで俺の選択は正しかったと思えた。死にたくないしね……

そして俺達は床に就いた。

「明日が最後の暗殺任務…」

俺の部屋でそうつぶやく。暗殺に対しては名残惜しくはない。むしろ嬉しい。

だが、この街と離れるのはつらかった。

「まあ、どこでもやっていけるよな…」

最後にそう呟いて眠ることにした。

……それにしてもあのイメージはなんだっただんだ？

第8話（後書き）

どうでしたかね？あの選択肢？感想がほしいところですね…
えっ？やっぱり駄文だった？

……精進したいと思います。

第9話（前書き）

暗殺ミッションの開始。

はたして成功するのでしょうか？

読んでくれる人に感謝を

第9話

今日は曹操の暗殺任務の日だ。成功するかはわからないがせいぜい頑張りますかね。

「じゃあいつてくる」

「気をつけてね」

そう言って家を後にした。

「おーい、その、お茶を持ってきてくれ」

「はーい、ただいま」

今、俺は城で従者をやってるんだけど……仕事が多い！

こんなじゃ曹操なんて見つけられないじゃん！

しかもなんで俺が中年オヤジのためにお茶入れなきゃいけないんだよ？！

「おい、お茶遅いぞ！早くしろ！」

「はい、急いで！」

てめえには雑巾の絞り汁入りの茶飲ませてやるよ！うしゃしゃしゃ。

笑い声

……待てよ、冷静になるんだ…俺はここに何をしにきたんだ？

決してイラつく上司に絞り汁入りの茶を飲ませるために来たわけじゃないはずだ…

「はい、お茶です」

「こんどから、もっと早く入れろよ、うすのろ」

そういうと上司はお茶を口にした。YES、ミッションコンプリートだぜ！

「……であるからして……することが……」

今、昼議をしてるんだけどこの中に曹操が居るはずなんだ。

確か…曹操って今は青年くらいの年だよな…、体格は痩せ形だったと思うんだけど…

「そんな人いないじゃん……」

この会議には城の全員が出席しているはずなんだが…。どうなってるんだ？

今いるのは従者を除くと、脂ぎって太った男たちと、一際目立つ金

髪の女の子だけだ。

「ではこの案件は…曹操殿に任せるとしましょう」

おっ！なんだ、曹操いるんじゃない、いや、一時はどうなるかと思っただけだね。

「…わかりました、その案件はこの曹孟徳があずかるわ」

え？あれが曹操？確かに曹操と言われて声を出したのはあの金髪の女の子だけだ。

聞き間違いか？だって曹操が女な訳がないし…うん、ありえない。絶対にありえない。

「なあ、あの娘って名前なんていうの？」

一縷の望みを胸に同じ従者仲間に聞いてみる。

「ん？ありゃあ、曹操っていう人だよ、さっき自分で名乗ってたじゃないか…」

呆れたように言われてしまった…

いや…確かにさっき自分で名乗ってたけど…それは…あれだよ…なんていうか…

「悪い…ちょっと便所行ってくるわ」

そう言っただけは会議所から抜け出し、しばらく歩いた後、

「ウソだろ————!!!!!!」

頭を抱えて叫んだ。

「あれか、曹操は実は女の子だった？……いやいや、それはないだろう。だって正史で

も男だったはずだし…、あれか…男の娘ってやつなのか？この時代から…？…だが、胸もちやんとあったよな…？。いや、あれだって寄せて上げれば何とか…なるか？…っていうか金髪ってなによ？どうなっちゃってんのよこれ！？……まずいな落ち着くん…、まだ女だと決まった訳じゃない。そうだ…本人に聞いてみよう…」

……よし、そうと決まればさっさと聞きに行くか。

……いやいや、だめだろうそれは、だって俺はこれから殺そうっていう人間だぞ？！

そんな人間が男か女かなんて些細な問題を聞きに行けるわけがない！

………いや、些細な問題でもないよね？！歴史が根本から歪んじゃうじゃん！

ああー俺はどうすればいいんだよ————!!!!!!

「よし、気にしない方向でいこう!」

あれから5時間じっくり考えた結論がこれだ。性別なんて些細なことでだ。

そろそろ準備もしないといけないし、正直考えても埒が明かないし……

そう考えると俺は暗殺の準備を始めた。

草木も眠る丑三つ時……そろそろ眠った頃かな……

部屋にそっと忍びこむ……それにしても女の子の部屋に忍び込んでいいのかな?

そんなくだらないことを考えてるうちにベットの近くにたどり着いた。

短刀をゆっくり懐から取り出し逆手に持ちかえる。

それにしても……

「意外とあっけなかったな……」

あの曹操だと思ったのでそれなりの準備を整えたんだけどね……

まあ仕事が楽なのはいいことだからいいけどね…

そう思うと俺は短刀を振りかぶりそして…

「武器を捨てなさい」

刃物を背中に突き立てられた…あれ？いつの間に後ろにいたんだ？

「聞こえなかったの？、…武器を捨てなさい」

威圧感を込めて言う。

抵抗しても無駄の様なのでおとなしく武器を捨てる。だって死にたくないし……

「そう…それでいいのよ」

「華琳様、そんな賊なんぞ早く切り捨ててしましましょう！」

「まあ待つんだ姉者、誰に雇われたのか拷問してはつきりさせなければ…」

一人はとても物騒なことをいい、もう一人がかなり物騒なことを言う。

どちらも変わらないか…それにしてもみんな女性の声だな。

いや！そんなことよりも今はこの状況を打破しなければ…！

俺の脳をフル稼働させて逃げ道を探していると後ろから、

「それで…何のためにここにいいのか…説明してもらおうかしら？」
「ってそんなの見たらわかるだろう?!」

何処の世界に刃物持って女の部屋に殺す以外の目的で侵入する馬鹿がいるんだよ!？」

「……見たらわかるでしょう…」

「ええ…あなた便利屋ね」

「…曹操様にも知られているとは…光栄の極みです」

どうせ殺されるのなら皮肉の一言でも吐いておこう。

ああ…最後で失敗するなんて…これも修正力なのか…それとも己の力量不足か…。

わるいな杏…ミスっちゃった。約束守れなくてごめんな…。

「そう、ありがとう、ならあなた…私のために働く気はないかしら？」

「「「なっ?!」「」」」

なに言ってたんだ?この人は?

「しかし、華琳様?!」

「春蘭、わたしは彼と話しているのよ？」

なんかおかしい展開になってきたな…

「あなたのその知識、わたしの霸道の大きな手助けとなるでしょう」

…確かに俺の知識をうまく扱えば大半の人間を処分できるだろう。
上層部は真っ黒だし…。

「…しかし、いいのですか華琳様？この男は華琳様の命を…」

「秋蘭、彼は雇われないと仕事をしないのよ」

「それは存じておりますが…」

…その気持ちよくわかるよ、なんというか煮え切らないよな。俺も
今そんな感じだし…

「それで、返事は？」

なんなんだこの展開は？殺しに来て、見つかって、仲間になれって
誘われる？

意味がわからない……、普通殺されと思うんだけど…

「…殺さないのですか？」

「あら？殺してほしいの？」

そつ言つと背中 of 刃物に力を込められる。やばい、ちょっと…刺さっ

ちやうつて！痛っ！

…どうすればいいんだ？曹操の仲間になる？馬鹿げてる…だが…これはチャンスなんじゃないか？腐れ役人どもを潰せる。それに…まだ死ねない…杏を残しては死ねない！

「わかりました」

「というと？」

「曹操様の覇道の助けとなりましょう」

「ですがひとつ頼みごとがあるのですが…」

「聞きましょう」

「俺には妹がいるのですが、このことを知られたら報復として始末されるかも知れません」

「そう、ならこちらが保護しましょう。それでいいわね？」

「ありがとうございます」

…どうやら刃物をどけてくれたようだ…。後ろを向いてみると女性が3人いた。

一人目は、会議の時に見た金髪の女の子。

二人目は、黒い髪のロングでおでこのアホ毛が特徴的な女性。

三人目は、銀髪で片方だけ目が隠れている、クールという感じの女性。

「紹介するわ、彼女が夏侯惇、そのとなりが夏侯淵、そして私は曹操よ」

簡単な自己紹介…だが俺にはとても大変な事実が待っていた。

「えっと…いきなりで悪いんだけど…みんな女の子だよね？」

スイッチを切り替える。これからは暗殺者としてではなく徐庶として接していきたいから。

「むっ？あたりまえではないか」

「当然だ」

「どう見れば男にみえるわけなのかしら？」

三者三様の肯定、でもそれって…つまり…女ってことだね…

「…信じられない……」

「…信じられないってどういう意味なのかしら？」

…やばい、声に出てたようだ…、曹操が殺気を出している。

「いや…あのですね…曹操様？」

まずい！ここは早く機嫌を取らなければ俺の命は…

「貴様あ！華琳様になんていうことを！」

「命が惜しくないようだな……」

訂正、曹操だけではなくみんな怒ってる。

曹操が鎌を構える。…さっきの刃物って鎌だったんだ…

…なんて悠長に考えてる暇なんてない！早く打開策を！！

「……そんなに怒るなんて気にして……」

言い終わる前に俺の意識は曹操様によって刈り取られた。

第9話（後書き）

絡ませてみましたがなんとというか…都合がいいことばかりですね…
なんというか…やはり駄文です。

もっとうまく書けるようになりたい。

第10話（前書き）

いえ、いい役人達を肅清する話だぜ。

読んでくれる人に感謝を

第10話

今俺は、曹操様の霸道の助けとして腐れ役人たちのリストを作ってるんだけど…、

「これは…想像以上だな…」

夏侯淵様の呟き…その反応も当然だろう…

このリスト通りになれば役人の4/3は処分できるだろう…

「それにしても…あの便利屋がこんな男だったとは…」

「?どういう意味ですか?」

「噂では、便利屋はとても冷血で、己の死すら顧みず任務を遂行する男だそうだが…」

…どんな湾曲した噂が流れてんだよ!? 発信源は誰なんだ!?

「まあ…噂なんてほとんどがでたらめですから…」

「うむ、そうだろうな…他にも天に着くような大男…という噂もあったな…」

「でたらめにもほどがありますね…」

まったく…もつと良い噂はないのか…、殆ど出任せだったし…。

まあ、生き残ただけでも十分に幸福か…、

俺は、曹操軍の将としてではなく、あくまで一時的な協力関係ということになっている。

この仕事が終われば俺は暗殺家業から足を洗え、なおかつこの街の平和にも繋がるだろう。

それにしても…まさか、本当に曹操様たちが女性だったとは…、

前回の一件でよくわかった。痛いほどにな。

ならこの世界は一体何なのだろうか…？、パラレルワールド？まさか正史が違うのか？

「…ん？どうした？手が止まっているぞ？」

長い間ばぁーとしていたのだろう、夏侯淵様が怪訝な顔をしている。

「…考え事ですよ…」

「そうか…なあ、やはり華琳様に仕える気はないのか？」

「今はまだ…そんな気はないですね…」

「…そうか」

誰かに仕える気なんてさらさらない。将になれば戦争に駆り出され

る、死ぬ確率も増す。

兵士ならば隙をみて脱走すればいいだけだ。…ヘタレだな……。

「秋蘭、徐庶、仕事は終わったかしら？」

曹操様が部屋に入ってくるなり質問をしてくる。

「はっ、こちらになります」

夏侯淵様がリストを手渡す。曹操様はそれを見て…

「…上出来だわ、これを早速朝議のときに提出するわ。行くわよ」

「はっ！」

徹夜明けなのに元気なものだね…これも鍛錬の賜物なのかな？

「では俺は失礼して…」

「なにを言っているのかしら？あなたも来るのよ？」

「は？」

何を言ってるんだこの方は？

「秋蘭、連れてきなさい」

「承知しました」

痛い！腕引つ張るなつて！取れちゃうから？！……待て、角は自分で、ギヤー！

会議所の前で曹操様は

「あなたはここで待機していなさい」

と言い夏侯淵様と夏侯惇様を伴い会議所の中に入って行った。

…にしても待機してろつてどういう意味だ？あれか…番犬的な感じ？

…確かに犬と呼ばれることもあったけどこれはひどいんじゃないかな…

10分ほどすると中から、

「徐庶、入ってきなさい」

という声が聞こえた。

…やっぱり犬みたいな扱いなのか？ここは思い切つてワン！って言うべきなのか？

「はっ！失礼します」

そつ声をかけて会議所の中に入る。ん？ワンなんて言えるわけがな

い。恥ずかしいし…

部屋の中には腐れ役人たちが俺のことを恨めしそうに見ている。

なんだこの状況は？そう考えていると

「この方に見覚えのある方がいるんじゃないかしら？」

曹操様の言葉に大半の役人の顔が青くなる。

「し、知らん！そんな下賤の輩など知ってるはずがない！！」

おいおい…嘘はつくなよ…あんたお得意様だったじゃん…

「わしもしらんなあゝ、さて厠にでも行くか…」

いやいや…顔真つ青にしながらそんなこと言っても説得力無いでしょ…

「僕は…僕は…バブウ…」

………君には何があったんだ？幼児の真似をしたら逃げられると思つたのか？

「ならば拙者は……ブヒィー」

対抗する気なのか？！まあ体格は確かに豚だな……

…っていうか俺はこんな野郎共にいいように使われてたのか？！なんかシヨックだな…

「……はあ…春蘭、秋蘭」

嫌そうに曹操様が命令する…まああんな奴らと関わりたくないわな…

「了解しました」

そう言うと夏侯惇様と夏侯淵様が役人どもを引っ張っていく。多分処刑されるのだろう…

……これでいいのだろうか？

「……………」

「徐庶？どうかしたのかしら？」

曹操様が聞いてくる…なんていったらいいんだろうな…

「……これでいいのかと思ひまして……」

「なに？あなたは、あの者たちを生かせというのかしら？」

少し機嫌を悪くしたようだ…声に怒気が混じっている…

「いや…あいつらではなくて……俺のことです……」

あいつらにももちろん罪はある…しかしそれを言うならば俺も罪人なのではないか？

「……俺は…嫌々でも…たくさんの人を殺してきました。…あいつ

等が罰せられて、俺が罰せられないのはどうなのでしょう？」

俺の罪…いくら懺悔しても消えない一生の重み…軽くはなっても消えない痛み…

「だから…俺も……………」

「あなたはあいつ等と違って罪を認め、その行いを悔い、精いっぱい懺悔してきた」

俺の告白は曹操様の凜とした声によって遮られた。

「だからあなたには罰はいらないわ。もし罰がないと生きられないというのならば、その生が罰となるわ。死の淵まで後悔し、罪を晴らすために行動する。それがあなたの罰よ」

…ハハハ、なんていう長い罰なんだ。まさに終身刑って奴かな…。

「さすが霸王様…罰が厳しすぎますね…」

「フフフ、その割には顔が笑ってるわよ」

顔を触つてみると確かに笑っているのだろ…

「まだ私に仕える気はないのかしら？」

曹操様が問いかける…俺は

「…いや、まだ俺にはふさわしくないでしょう」

「そう」

答えを分かっていたのか、落胆もせずに返答する。

「だから…もしご用命があれば万屋として特別価格でやらせていただきます」

「ええ、わかったわ」

そう言つと曹操様は部屋を出て行く…小さいながらに大きな背中…

…いつか俺もこの霸王様の覇道を支えられる人物になりたい…

「ああ、そうね」

ふと立ち止まると曹操様は、

「私の真名は華琳よ。これからは華林と呼びなさい」

「いいんですか？」

「私が許すと言つたのよ？あと、その他人行儀な口調もやめなさい」

あらら、見破られてたか…

「それじゃあ、俺の真名は護守さねもり、よろしく頼むな…華琳」

「ええ、よろしくね、護守」

そう言つと華琳は部屋を出て行き俺一人となった。

「……こんな三国志も悪くはないか…」

俺の呟きは誰にも聞こえなかっただろう。

このあと家に帰ると荷造りしていた杏に事情を話すのがとても大変だった。

ちなみにあの役人の中の1名が脱走したそうだ…誰なんだろうな？

第11話（前書き）

今回は主人公の受難の日です。

読んでくれる人に感謝を

第11話

「…天の御使い？」

「ああ…なんでも流れ星に乗って現れてこの世界を平和へと導いてくれるらしぞ」

ある日、仕事先で世間話として出た天の御使いの話…、

「へえ、流れ星に乗ってね…」

「そうだ！すばらしいと思わないか？」

ばかばかしい…何が流れ星に乗ってだ…確実に人間じゃ無いじゃん。

それに平和と言うのも人間をせん滅したら平和になるだろうし…あれ？

もしかして宇宙人の話なのかこれ？

「な、なあ？」

「？どうしたんだ声震わして？」

「べつ、別にそんなことはないさ、それよりそいつは…人間なのか？」

「さあな…もしかしたら違うのかも……………」

「失礼しましたー!」

さて、今日の仕事終わりー!さつさと家に帰ろう!そうしよう!!

……………別に怖がってる訳じゃない。断じてない!

「ただいまー」

「おかえりーってどうしたの?そんなに息切らして?」

「……………なんでもない…問題もない」

そう言って息を整えていると、外から何やら良からぬ気配を感じた。

なんと言っか……………地震と火事と雷を同時に体験するような気配だ…。

「杏…今日はさつさと店を……………」

「徐庶は居るか!」

言い終わらないうちに夏侯惇様が来た。

「こんにちは、春蘭さん」

「うむ?おお、杏ではないか、元気か?」

杏と華琳たちは警備の顔合わせの時に意気投合して真名を交換し合っただって。

…そのまま帰ってくれないかなあ」

なんて考えもむなく夏侯惇様は、

「そんなことよりもだ徐庶よ、貴様、なかなかできるのだろう？」

…できるってなにをだろうね？全然わかんないや…、

「出来るとは何をですか？夏侯惇様？」

「決まっているだろう」

いや、なんとなくはわかるんだけどわかりたくないんだよね…。

「あれですか麻雀とかですかね？」

お願いだ！！ここでうんと言ってくれ！！！！

「まーじゃん？何だそれは？私が言っているのは武だ！！」

そんな淡い期待も木っ端みじんに破壊されてしまった……

夏侯惇様は俺の返答を待たずに引っ張っていく。

「待ってください！俺はまだ返答して……」

「杏も来るといい、一人では危ないからな」

畜生！今、ちょっと止まったから期待しちまったじゃんかよ！！

「はい、じゃあ戸締りをしちゃうんで待っててください」

杏：俺は今…首掴まれてるんだけど…それについてはなんかないんですか？

しかし、杏は特に何も言わず…俺はそのまま城に引きずられて行った。

城の訓練所に着くと先客が居た。

「久しぶりだな、徐庶」

「お久しぶりです」

夏侯淵様と…

「こんにちは、護守、息災かしら？」

「…今は息災だけだね、華琳」

華林である。

「じゃあ、早速だけど大丈夫かしら？」

「はい、華林さま！」

そんな元気に答えないでくれ…

短刀は…本物だから使えないな、懐にしまっておこう。

俺は近くにあった武器の山から一般的な大剣を取った。

もちろん訓練だから刃は潰してあるみたいだ。

「こちらも準備できたよ、華琳」

「そう…じゃあ、始め！」

……生きて帰れるかな？

「でえええええい！！！」

気合いと共に振りぬかれた太刀筋…って？あれ？！

ガキン！鉄と鉄がぶつかる音…しかし俺はそんなことよりも気になることが…

「…あの…夏侯惇様？それってもしかして…真剣ですか？」

「当り前だ！！貴様、よくも華琳様の真名を汚しおつてえ！」

ブオン！！俺の首があつたところを大剣が容赦なく切り裂いてきた。

「っ？！ちよつと！！死んじゃいますつて！！！」

「うるさい！なら！さつさと！死ね！！」

大剣による連撃、その一つ一つが必殺の威力がある。

その一つ一つを的確に防いでいく。じゃないと死んじゃうし…

「はああああ！！！」

ドカン！！！！夏侯惇様の一撃は地面を抉った。

「ふう…あぶないあぶない…」

なんとか間一髪のところまで逃げられた。

「貴様あ！わたしを侮辱しておるのか！さっきから逃げてばかりではないか！」

しょうがないだろう…俺は防御なら一流だけど、攻撃は一般兵並なんだから…

「いや…俺は攻撃するのがへっぽこなんだが…」

「知るかあ！逃げてばかりではなく打ち込んでこんかあ！」

……いいぜ…なら見せてやるよ…この…へっばこの攻撃をよおー！！
そつ気合いを入れ俺は大剣を上段に構える。

「はあああああああああ！……！！！！！！！！」

俺の渾身の一撃は夏侯惇様に届く！！」「ぐはあ……」

はずもなく腹に蹴りを入れられてしまった…

痛みでうずくまっていると夏侯惇様が俺の前に立ち…

「これで終わりだ…死ねえ！！」

死刑宣告をしゃがった。

チャキ！剣を構える音が聞こえる…えっ？！マジ？…訓練で殺されるの？！

速く武器を構えないと……やばい！俺武器持って無いじゃん？！

ああ！武器あんなとこまで吹っ飛んでるし！？うおっ！本当に振り下ろしてきた。

…走馬灯が見える…初めてこの世界に来たときのこと…杏にボコされたこと…

そして…村の最後…親父の最後…。俺はああはなりたくない！だから！！

「……まだ…死ぬるかぁー！！！！」

痛みを堪えて夏侯惇様にタックルをする。突然の襲撃に驚いたのかバランスを崩し、

倒れた。その隙に隠し持っていた短刀をそのまま出し夏侯惇様の首に当てた。

「そこまで！」

華琳の声が響く…俺は夏侯惇様から退き、地面に寝転んだ。

それにしても疲れた…とても疲れた…かなり疲れた……、

もう二度とやりたくないな…すると、近くに誰かいる気配がして、

「ふん！なかなかやるではないか」

そう言つて夏侯惇様が手を差し伸べてくれる。…なんでこんな元気なんだ？

俺はその手を掴むと一気に引き上げられた。…これでも65キロはあるんだが…

「ええ、春蘭、護守、どちらも素晴らしい武だったわ」

そう言ってもらえると頑張った甲斐があったもんだな…

「姉者もよく我慢したな…えらいぞ」

…はい？我慢って？

「ああ、こ奴がうずくまっている時は叩き切ってやろうか迷ったんだが…」

…ん？迷ってた？どういうことだ？

「ええ、春蘭、よく我慢したわね、あとでご褒美をあげるわ」

…あれ？もしかして…俺手加減されてた？

「ありがとうございます、華琳様！」

……………なんなんだよ？俺の存在って？

俺は勝利したはずなのに、目からあふれ出す液体を止めることが出来なかった。

「護守もよくがんばったね」

ああ…杏だけだよ…俺をほめてくれるのは…、

「ああ、ありがとな、杏」

「それにしても春蘭さん強かったね」

いや…俺に味方はいないようだ。

玉座の間にて…

「それにしても、護守、あなたも素晴らしい武の持ち主なのね」

「ああ、姉者が手加減していたとはいえ、なかなかに見応えのあるものだった」

「ありがとうございます」

いや、褒められると嬉しいね。

「でも、褒められるところは防御に関してだけだったわね」

「そうですね、攻撃に関してはお粗末としか言えない出来でした」

「…それはどうも」

…なんなんだ？こいつらは褒めた後、貶さないといけないのか？

「俺はなんでも防御に関してなら一流らしいんだが…攻撃はな…」

多分、曹操軍の兵士と同じくらいの實力だろう。

…別にいいさ、俺は専守防衛タイプなんだよ。

「そつみたいね、春蘭、秋蘭、護守と真名の交換をしなさい」

「「はっ
」」

「えっ？」

「ああ、貴公ほどの腕前のものなら別にかまわん、なあ、姉者？」

「うむ、私もかまわん」

「いや、命令されてするようなことでもないと思うんだけど…」

まあ、かまわないって言うてるんだしいいのかな？

「では…わが真名は護守さねもりと言います。よろしくおねがいます」

「私の真名は春蘭だ。よろしく頼む」

「私の真名は秋蘭。姉者ともどもよろしくな」

二人と真名を交換する。なんだか胸が痛い……今日は気持ちよく眠れそうだな…

真夜中

「あれ？なんか胸がめちゃくちゃ痛いんだけど？あれ？骨折れてね？」

春蘭の蹴りのせいかな？畜生…訓練なんだから加減してくれよ…。

……………結局一睡も出来ずに朝を迎えてしまった。

第11話（後書き）

主人公は村の事件でいろいろなこと得ました。
生き汚さや、家族の大切さ、そして罪の重さ。
華琳達の手助けはしたいが戦争はしたくない…
それがいまだ彼が曹操軍に入らない理由です。

第12話（前書き）

今回は親睦を深めるイベントって感じですかね…
まあグダグダですけど。

読んでくれる人に感謝を

第12話

春蘭と秋蘭と真名を交換して1週間、俺の周りには2つの変化があった。

一つ目が、華林が陳留の刺史になったこと。

なんでも、腐れ役人の肅清や、黄巾賊の撃退が高く評価されたい。

二つ目が、黄巾賊の増大、なんでもここ最近、急速に数を伸ばしているらしい。

反乱を起こしたい気持ちはわかるけどもつと優しくはできないのかねえ？。

…それにしても…

「暇だなあ」

外はとても気持ちのいい天気なのに仕事が全然来ない。なんでだ？

…最近はお金の出費も激しいからこころで稼いでおきたいんだけどなあ。

杏は近所の子供のところに遊びに行ってるからいいし、

街を回ろつにも店を開けるわけにはいかないし…、

「護守はいるか？」

「ん？ああ、秋蘭さん」

珍しいな…秋蘭さんが来るなんて…、

「仕事を頼みたいのだが大丈夫か？」

「ええ！大丈夫です！むしろ大歓迎ですよ！」

「そうか…それは良かった、賃金はこの程度でいいか？」

そう言つて秋蘭さんはかなりの額を差し出した。

…額が大きいということはそれだけ面倒な仕事ということだ…。

つまり大変な仕事なのだ…それも曹操軍の…、

ここは断固として、絶対に逃げなければならない！

そう決めた俺は否定の言葉を口にしようとするが…、

「まさか一度やると言ったのに辞めるなんて言わないな？」

退路を塞がれてしまったようだ。

…仕事の安請け合いだけは絶対に駄目だと心に刻みつけておこつ。

さらさらさらさらさらさらさらさらさらさらさらさらさらさら

今、秋蘭さんの執務室で書類仕事をしてるんだけどさ……、

「…なんなんだこの量は……」

この部屋には大体１メートルほどの木簡の山が三つ出来ている…。

それを見るだけでやる気なんてものは吹き飛ばされるし、

書くものも鉛筆じゃなく、筆だから最早やる気なんて爆散しちまってるね。

「そう言っつな…これも仕事だろう」

秋蘭さんが呆れるように言う。

この空間で未だにやっていけているのは秋蘭さんの存在のお陰である。

やはり美人はいい…見てるだけで癒されるね…。

もし秋蘭さんが居なかったらこんな仕事なんてほっぽり出して逃げてるだろう。

…いや、ホントにはしないよ？、だって信用問題になるし…、

それにしても…、

「秋蘭さんはいつもこんな量の仕事をしてるんですか？」

そうだとしたらいつか絶対に過労で倒れるぞ。

「いや…今日は特別に多いな、…姉者も仕事をほっぽってしまったしな…」

春蘭…あんたはなにをやってるんだ？ちゃんと仕事しなきゃだめだろう。

俺にも秋蘭さんにもしわ寄せが来るんだからな。

「それに華琳様も刺史になられたし、今まで以上に多くなったな」

「それは大変ですね…」

「まあ、華琳様のためなら別に苦じゃないさ」

そう答える秋蘭さんはとても輝いて見えた。

「よし、じゃあ護守はこれを姉者の部屋に持って行ってくれ」

「わかりました」

手渡された木簡を持って部屋を後にする。

春蘭の部屋の前に着くと異様な音がする。

カーン、カーン、カーン。

「…うわゝ、なんか嫌な予感しかしないわ…」

つと言つてもこちらは仕事中なので行くしかないわけで…

コンコン、「春蘭ー、入ってもいいか？」

ノックは忘れない。紳士としても当然だし、

もし春蘭の機嫌が悪かったら入った瞬間に胴と首がおさらばしてる可能性もあるからな…。

「護守か？入ってもいいぞ」

よかった…機嫌が悪いみたいじゃないな…

「失礼しま…それは何だ？」

部屋に入って目にしたのは大量の木端と華林の人形だった。

「うむ？このことか？これは華琳様の人形だ」

春蘭が胸を張って答える。

「そんなの見ればわかるよ…なんのために作ってるんだ？」

それにしても妙にリアルだな…どうやって作ったんだ？

「そんなの決まっておろう！華琳様のためだ！」

…わかる訳ないだろう。…にしても本当にリアルだな…

そう思っで手で触れようとすると、

「貴様あ！人形とはいえ華琳様に触れてみる！その首を切り落とすぞー！」

なんて言葉が後ろから聞こえたので急いで手を引つ込めた。

後ろを向いてみると大剣を今にも振り下ろしそうな格好をした春蘭が居た。

「わかった！わかったからその剣を下してくれ！」

必死のお願いが効いたのか春蘭は剣を下してくれた。

「それで何の用だったんだ？」

「ん？…ああ、忘れてた…秋蘭さんがこれを渡して来いだったって」

そう言っで秋蘭さんから預かっていた木簡を渡した。

「おお、わるいな護守」

「じゃあ、俺は帰るわ…」

そう言っただけ俺は部屋を後にした。それにしてもなんだったんだあれは？

「秋蘭さん、渡してきましたよ」

「そうか、御苦労だったな」

部屋帰ってみると秋蘭さんはお茶を飲んでいた。

「じゃあ、今日はもう終わりですか？」

書類仕事ばかりだったから体が硬くなってしまったようだ。

「そうだが…一杯どうだ？」

そう言っただけ俺に席を勧めてくる。

無論こんな良いお誘いを断る理由もないので、

「もちろん」

と言って席に着く。

秋蘭さんが淹れてくれたお茶を一口飲む。とてもおいしい。

疲れた体に染み渡る感じがする。

今ならこのお茶のために頑張れる気さえする。

「うまいか？」

「はい、とてもおいしいです」

そう言っていると秋蘭さんがほほ笑む。

「それはよかった」

それっきり会話が途絶える……ちょっとした静寂。

あれ？俺何か粗相しちゃったかな？

なんてビクビクしていると秋蘭さんが、

「……なんで護守は将にならないんだ？」

と聞いてきた。

「……………」

「答えたくないのか？」

気を遣わせてしまったのか心配そうに聞いてくる。

「いや…そうじゃないんですが…」

話せば楽になるだろうか？重荷を背負わせるだけではないか？

この答えは自分で探すべきじゃないのか？

などの考えが浮かぶが俺は話してしまった。

「俺が将にならない理由は…答えがないからです」

「答え？」

「人を殺す答えがまだ見つからないからです」

人を殺す答え…戦争に参加する理由…俺にはそれが存在しない。

迷いは刃を狂わせる。迷いを持ったまま戦場に出ても邪魔なだけだろう。

それが俺の士官しない理由。

「なぜ秋蘭さんは戦うんですか？」

聞いてみたかった。他の人の戦う理由を知れば参考になるはずだから。

「私は…華琳様のためだろうな」

華林のために…その答えはとても尊いものなのだろう。

その証拠に俺には秋蘭さんは輝いて見えるし…、

俺も華林の覇道のための礎になりたいと思っている。

しかし…それだけではいけないような気がするんだ。

結局は華林にすべてを擦り付けているような気がするから。

「…俺も華林の覇道のために戦いたいと思います。でも自分の祈りも籠めなければ不完全だと思うんです。」

多分、秋蘭さんも春蘭も自分の願いを持っているのだろう。

だからこそ二人とも俺には輝いて見えるんだと思う。

「だから…」

「いいと思うぞ…」

「え？」

当然の肯定。

「私はその思いはいいものだと思うぞ。なんにも考えずに戦うよりもよっぽどな…」

「……………」

「何の思いも籠めずに武を振るうのはただの蛮勇だ。そんな奴には武将なんて任せられないからな」

だからそれでいいと…悩んだ末に得たものには価値があると言ってくれた。

「ありがとうございます」

「礼には及ばんさ…あと…敬語はやめてほしいな」

「わかった…ありがとうございます秋蘭」

「ああ、気をつけて帰れよ、護守」

最後の一口を飲む。その味はさっきよりもおいしく感じられた。

「……もう真っ暗だな」

ずいぶん遅くなってしまったようだ。空にはたくさんの星が煌めいている。

いつの日か俺もあの三人の様な願いが持てることを祈って家路を歩いた。

第12話（後書き）

秋蘭の口調が全然わからなかった。
途中別人だろって思いましたし…

ああ、もっとうまく書けるようになりたいです。

第13話（前書き）

北郷一刀君の光臨！…な話です。
ほとんど原作の使いまわしですが…
読んでくれる人に感謝を

第13話

外はいい天気だなあ。

「護守、お茶いる？」

「ああ、頂戴」

しばらくして杏がお茶を持ってきてくれた。うん、おいしい。

「ありがとね」

「どういたしまして」

杏がほほ笑む、それだけで幸せだね。

……平和だなあ、でも大抵こういう平和って崩れるんだよなあ。

…ほら外から足音が聞こえるし、…また厄介事かな…。

やがて曹操軍の兵士が来て、

「徐庶様、曹操様がお呼びですので城にお越しく下さい」

と言って、すぐに帰って行った。

…それにしてもなにかあったのかな？さっきの兵士も武装してたし…

「護守、どうするの？」

「もちろん行くよ」

そう言うのと俺達は城に行く準備を始めた。

「賊の討伐？」

「ええ、近くの村に賊が現れたらしいわ」

現在、華林の執務室で華林と秋蘭と一緒にいる。

それにしても賊か…あまりいい思い出はないな…

「…なぜ俺が呼ばれたんだ？」

「それはだな、優秀な将が欲しいからだ」

俺は別に優秀でもなんでもないんだけどな…。

「それで、返事は？」

…うーん…まだ戦場に出るのは嫌なんだけどもあー、どうすればいいんだか…。

……いや、むしろこれはチャンスなのか？

考えてるだけじゃなく行動してみるのも一つの手なのかもしれないし……。

「じゃあ受けさせてもらおうよ」

「そう、じゃあ早速仕事をしてもらおうかしら」

こうして初の軍団での仕事が始まることとなった。

始まったんだけど……

「なあ、兵糧はこれくらいでいいのかい？」

「いや、少なすぎる……もっと持ってきてくれ」

「おい、槍が足りないんだが……どうなってるんだ？」

「……それは第二格納庫に入ってるから取ってきてくれ」

「兵士の数足りないんだが……何処に居るか知ってるか？」

「……それはあなたの管轄でしょう」

「俺の……理想を知らないか………」

「……………あなたは理想を探す前に良い医者を探すのをお勧めします」
なんなんだ！この仕事の量は？！多すぎるだろう！！

大体なんで指示されたことすらできない奴らばかりなんだよ！！！！

おまけに最後の奴！！てめえの理想なんて知るかぁ！！！！！！

はぁはぁはぁ、疲れるな…將軍つてこんなに大変なのか…。

「準備は出来たかしら？」

「ああ、華林か…もう少しつてとこかな」

あいつ等がへマをしなければな…………。

「「「持つてきましたよ」「」」

声をそろえるな気持ち悪い…、一人足りないけどまあいいや。

「準備完了だ、華林」

「そう、初めてにしては上出来ね」

そつだったのか？俺はてつきり一番最後かと思つたんだが…

「……………流星？不吉ね…」

華林が突然上を向いて呟いた。

流れ星か…こんな真昼間から珍しいな…。

あれ？なんか忘れてるような気がするな…なんだっけ？

「華琳様！出立の準備が整いました！」

遠くから春蘭の声が聞こえる。その声で俺は現実に戻された。

「……華琳様？どうかなさいましたか？」

秋蘭が華琳に聞いている。

「今、流れ星が見えたのよ」

流れ星…流れ星…やばい……なんか気になるな…。

「あまり吉兆とは思えませんね…出立を伸ばしますか？」

吉兆？うゝんあと少しで思い出せそうなんだが……、

「ああ！思い出した！！」

「?!護守？いきなりどうしたのかしら？」

おっと大声を出してしまったようだな…

「華林は知らないのか？天の御使いつて噂を？」

「『天の御使い？』」

「なんでも、天の国から流れ星に乗って現れるらしい。そしてこの世に平和をもたらしてくれるんだってさ」

まあ、おとぎ話だけどねっと言ってこの話を締める。

そしてこの話を聞いた華林は、

「へえ…面白そうじゃない…春蘭、出立を急ぐわよ」

「はっ」

なんか乗り気になったみたいだ。…こんな話なんてしなきゃよかった。

「総員、騎乗！」

「無知な野党どもに奪われた貴重な遺産を取り戻すわよ！…出撃！」

こうして俺の初陣が始まった。

「なあ、さっきの話は本当だったのか？」

秋蘭が聞いてくる。

「さあ…あれがそうと決まった訳じゃないし…」

今俺達の前には青年がいるんだけどまさかあれが天の御使いなのか？

その青年は兵士を見慣れないのか怯えているようだ。

「秋蘭、護守、何をしてるのかしら？」

春蘭と華林がこちらに来て聞いてくる。

「彼についての考え事をね…」

「なにか分ったことはあるかしら？」

「…特にないな」

本当は結構あるけどね、まずあの恰好は十中八九制服だろう。

よって俺と同じ未来からの転生者なんだろうけど…なんか違うな…。

俺の時は服もこの時代の物に変えられていたしな。

「そう…それじゃああの者に話を聞きに行くわよ」

「しかし華琳様、危険です」

まあそれも尤もだな…罠の可能性もあるし…

「大丈夫よ春蘭、いざとなっても護守が守ってくれるわ」

華林…信用してくれるのは嬉しいんだけどこの状況で言われると…

「護守、華琳様のことを全力でお守りするんだぞ！」

「分ってるからそんなに騒がないでくれ」

「なんだとお！」

「姉者…止めないか」

「ふふっ、じゃあ行くわよ」

そう言っただけで俺と華林と秋蘭と春蘭は青年のところに向かった。

「華琳様、こやつは……」

「……どうやら違うようね。連中はもっと年かさの中年男だと聞いたわ」

うーん、近くで見るとなかなかイケメンだな…妬ましい……、

「どうしましょう。連中の一味の可能性もありますし、引っ立てましようか？」

「いや…その必要はないだろう」

「なぜそう言い切れるんだ。護守？」

「賊にしては身なりが良すぎるからな…大方、何処かの貴族かなんかだろう」

絶対に違つたろうけど。その証拠に顔が嫌がつてるし…。

「そうね…逃げる様子もないようだし…連中とは関係ないのかしら？」

「だったらここは彼の保護を……」

頼もつとした矢先に、

「我々に怯えているのでしょうか。そうに決まっています！」

春蘭…あんたは黙っていてくれ…話がややこしくなるから…

「これは怯えてるんじゃないで、ビックリしてるっていうんだよ」

子供をあやすように言うが、

「護守！貴様あーわたしを馬鹿にしているのか！」

逆効果だったようだな…今後は気をつけよう。

「姉者…落ち着け」

「むう…秋蘭…」

「あ、あの………」

ん？ああ、青年の声か…年は…俺と同じくらいかな？

「………何？」

華林が答える。

「君……誰？」

おお！素晴らしいな！普通は真名で呼んでしまふのにそれを避ける
とはな。

喜べ青年。もし真名で呼んじゃったりしたら君の首は胴とお別れし
ていただろう。

「それはこちらの台詞よ。あなたこそ何者？先に自分の名を名乗り
なさい」

おっ！ここはなんて答えるんだ？俺も通った道だからな。

「えっと……北郷一刀。日本で、聖フランチェスカ学園の学生をして
る。日本人だ」

やっぱり転生者だったのか。親近感が湧くな。

それにしても……正直に答えるんだな。……馬鹿なのか、馬鹿正直なの
か迷うところだな。

「……………はあ？」

この反応も当然だろうに……ちゃんと考えて行動しなきゃだめじゃな
いか。

「それより、ここはどこなの？日本でも、中国でもないって言うし

…」

…ん？なんだ？彼はまだ自分が転生してるって知らないのか？

「貴様、華琳様の質問に答えんかあ！生国を名乗れと言っておるだろぅが！」

春蘭…そんなに怒って言ったら駄目じゃないか。ちゃんと答えてるんだし。

「い、いやだから！日本だって答えてるじゃないかつ！」

おおっ！良いぞ青年！春蘭に怒鳴られても答えられるなんてなかなかの度胸だ。

「まあまあ、春蘭も君も落ち着けて」

「そうだぞ姉者、そう威圧しては、答えられるものも答えられんぞ」

……ちゃんと答えているんだけどね…。

「北郷…と言ったかしら？」

「あ、ああ」

「ここは陳留…。そして私は、陳留で刺史をしている者」

「……しし？」

刺史も知らないのか？おかしいな…俺はすぐに分ったんだが…

「刺史というのは、街の政を行ったり、街の治安を守る階級のことだよ」

噛み砕いて説明をしてやる。

「…警察と役所を足して二で割ったようなもんか」

うーん…まあ正解かな。

「また訳の分らんことを…」

呆れたように春蘭が言う。

「要するに、税金を集めたり、法律を決めたり、街の治安を乱す奴を捕まえたり処罰したりする仕事なんだろう？」

「せいかーい、なら、今の立場はわかるな？」

「…税金の未納はともかく、街の治安は乱した覚えはないんだけど…」

「…そんな身構えなくてもいいだろうに。まああっちから見たら俺達の方が不審者か。」

「少なくとも、十分以上に怪しいわよ。春蘭。引っ立てなさい」

「はっ」

「まだ連中の手掛かりもあるかもしれないわ。半数は辺りを搜索。」

残りは帰還するわよ」

「春蘭、そいつは俺の馬に乗っけるから貸してくれ」

いくら縛られてるとはいえ女性と一緒にの馬に乗るのはね…

それに聞きたいこともあるし…。

「そうか、それは助かる。ほら」

と言って青年を渡してくる。

「そうにらむなよ…物扱いしたのは謝るからさ」

「…それでなんのようなんだ？」

話が早くて助かるな…頭は悪くないのかな…。

「まあ自己紹介から始めるか、俺の名は徐庶だ。よろしくな」

「なっ！？確か徐庶って?!」

「ん？俺の名前がどうかしたのか？」

やっぱり北郷は転生者なんだろう。じゃなきゃ慌てないはずだ。

「…いや、なんでもない。俺の名前は北郷一刀だ」

ふむふむ…名前からしても日本人だろうな…服装は、制服…つまり学生か。

まあそんなことはどうでもいい。俺が気になるのは…

「北郷…君は神様を信じるかい？」

この一点だけだ。

「えっ？神様って…別に信じてないけど…」

「……そうか」

多分嘘じゃないか…だとすると彼は俺とは違うプロセスで来たのか…。

だとすると何のために？俺達の意味は何なんだ？

………わかんないか…。

二人を乗せた馬はゆっくりと陳留へと向かっていく。

こうして俺の初陣は幕を閉じた。

第13話（後書き）

北郷君つて度胸あると思いませんか？

だつてまったく知らない人にタメ口で話せるんですから。

それに主人公とも口調がかぶりますし何らかの処置をしなければ…

第14話（前書き）

まずいです…前書きに書くことがなくなってきました……

何を書いたらいいのかわからなくなってきました。

読んでくれる人に感謝を

第14話

北郷を見つけた後、俺達は北郷の身元を割り出すために尋問して
るんだけど…

「なら、もう一度聞く。名前は？」

「北郷一刀」

「歳は？」

「17歳」

俺の一個下か…。

「では北郷一刀。おぬしの生国は」

「日本」

「好きな食べ物？」

「特にはないかな」

うん…それはいいことだね。

「……この街に来た目的は？」

「わからない」

「特技と趣味は？」

「うーん…剣道かな」

それは珍しいな。部活かなんかでやってたのかな？

「……………ここまで、どうやって来た？」

「前後の記憶がないから、それも分からない。気が付いたらあの荒野にいたんだ」

「身長と体重は？」

「…なあ、そんなこと聞いてどうするんだ？」

「ん？いやまったく意味なんてないよ」

なんか場の空気が悪いから和ませようと思ったんだけど…失敗だったか？

「護守は黙っていてくれ…どうしますか華琳様？」

「埒があかないわね。春蘭」

「はっ！拷問にでもかけましょうか？」

「だから！拷問されようが、今言った以上はわからないし、知らない

「いんだってば！」

「なあ、ここまで必死なんだから本当なんじゃないか？」

助け舟を出しとかなないと春蘭は本当にやりそうだしね…

「どうやらそうみたいね」

「後は、こやつを持ち物ですが…」

あるのは小銭とハンカチくらいか、…ん？小銭って言っても400円くらいしかないぞ？

学生としてそんなもんで大丈夫なのか？

「この菊の彫刻はなかなか見事なものね。あなたが作ったの？」

もし作ったとしたら捕まるけどな……。

「いや、それは百円玉…お金だし」

…まだまだ時間がかかりそうだな。

「秋蘭？彼はどうなと思う？」

「ん？…さあな…華琳様の決めることだろう」

華琳が決めることか…だったら殺しはしなそうだな。

なにかあっても俺が引き取ればいいしな…。

そんなことを考えているうちに自己紹介に移ったようだ。

「私の名前は曹孟徳。それから彼女達は、夏侯惇と夏侯淵よ。そして彼が…」

「徐庶だ。この街で万屋を経営してるから何かあればよろしくな」

出来るだけ優しくそんな雰囲気を出す。第一印象は大事だからね。

しかし北郷の反応は、

「……………は？」

疑問だった。まあ無理もないけどね。俺も同じこととして折檻されたし。

「聞こえなかった？」

「い、いや…ちゃんと聞こえたけど。ちょっと信じられなくってさ」

……………あれ？これまずいな……………俺へマしちまったかもしれない……………

あゝ畜生。華林がこつち見てるじゃないか……………言い訳考えておかないとな。

……………沈黙が辛い！北郷！！早くなにかしゃべるんだ！！！！

「それ、通称とか、別名とか、仮名とかコスプレネームとか源氏名じゃないよね？」

いいぞ北郷！その調子で続けるんだ！その間に俺は言い訳を考えるから！！

「何を馬鹿なことを。貴様、わたしが父母からいただいた大切な名前を愚弄するつもりか？」

春蘭が今にも切りかかりそうな声で言う。

「い、いやいや！そんなつもりじゃないよ……でもそれは、親が三国志が大好きだからつけた訳じゃないよね？」

おっ！三国志まではたどり着けたのか。ならあと少しだな。

いやいや、そんなことよりも今は言い訳だ。なんて言おうかな……。

別に言ってもかまわないんだけどね……、信用してない訳じゃないし……。

……いや、言わないでおこう……、俺はこの世界の異分子だからな……、

もし俺が未来から来た事がばれてしまったらどんな影響があるか分からない。

もしかしたら何もないかもしれないし、

天変地異でこの世界が滅んでしまいかも知れない。

俺だけが消えるだけかも知れないし、知ったものが全員消えるかも知れない。

そんな爆弾かも知れないものを迂闊に触れるわけないな。

そうこうしているうちに議論はヒートアップしたのか、

「華琳様！お下がりください！魏の王となるべきお方が、妖術使いなどという怪しげな輩に近づいてはなりません！」

なんて言って北郷に剣を突き立てている。なんでこんなことになったんだ？

「春蘭！とりあえず落ち着けて。ほら、剣を下せて」

「黙れ護守！華琳様にこのような輩は近づけさせぬ！」

そう言って春蘭は俺に剣を向けてきた。

「……なあ、俺に向けるのは間違いなんじゃないか？」

「知るかあ！護守、もしこやつを庇うのであれば……」

つと言って剣を光らせる。この目は本当にやる目だね。

…こんなところで死にたくもないしここは、

「…よし！じゃあ北郷のことを庇うのをやめよう」

北郷なんて見捨ててしまおう。うん。それがいい。

「えっ！今の助けてくれる流れじゃなかったの？ちょ、わかったこと話すから剣を突き付けないでくれ！」

と言って北郷は自分のことの考察を話し始めた。

そのあと北郷は自分の持っている知識や分かっている知識をいらないちょっとお頭の弱い春蘭に今の自分の状態を分かりやすく説明したり、自分が天の御使いであることにしたり、華琳の覇道の手助けとなることを約束し、あてがわれた部屋に行った。

…それで終わればよかったんだが…、

「それで護守、何か言い訳はあるかしら？」

俺は今、北郷が部屋に行った後さっさと逃げようとしたところを華琳に呼び止められ、

華琳の執務室で尋問を受けているところだ。

それにしてもなんで北郷の時はちゃんと椅子があったのに俺は正座なんだろうか？

「……………」

シャキン！黙っていたのが悪かったのか、華琳が笑顔で鎌を構える。

…そんな笑顔で構えないでくれよ…とても怖いじゃないか……、

「北郷一刀は私達の名前を聞いたときに信じられないと言っていたわ。確かあなたも同じことを言っていたわよね？」

……まさか本当にあの時のことを覚えているとはな…なんて記憶力だ……。

「さ、さあ…ただの偶然じゃないか？」

声が震えてるな…、ああ！これ以上力を込めると俺の首が！！

「へえ、偶然ねえ」

華琳がどんどん力を籠めて行く…あつ？！今ちよつと首筋に痛みが？！

まずいぞ！！これ以上は俺の生命的にまずい！！！！

ここは練りに練った言い訳を発動する時か？！

1 番 発狂した振りをして逃亡

2 番 クサい台詞を吐いて逃亡

3 番 普通の言い訳

「まっ、待つんだ華琳！あときは依頼主に男だと言われていたの
で焦っただけだ！！」

一時の静寂…この言い訳は苦しかったか？

だが他の言い訳なんてゴミみたいなものだったし…

やはりここはクサい台詞を吐いてトンスラの方がよかったか？！

…だがこの場合、今は逃げ切れても後で春蘭に殺されること確定だ
ろうな……

ならばいっそ、発狂した振りをして逃亡の方がよかったのか？！

いや…そうしたならここからは逃げられるだろうが、

そのあと俺はどんな顔をして華琳達に会えばいいんだ…！

絶対にシカトされるぞこれは…！最悪自殺も考えるね…！！

そんなことを考えていると華琳が、

「そう…護守は話さないつもりなのね」

と言って鎌を構えを解く。

しかし、華琳の口調はさっきよりも刺々しいものになっていた。

「あの、華琳？どうし……」

「時間をとらせて悪かったわね。下がっていいわよ」

俺の言葉を見殺して華琳は仕事に取り掛かる。

その口調は初めてであった他人のようで、温かみもなにも無かった。

「華琳、俺は……」

「黙りなさい、仕事の邪魔よ」

「華琳！俺の……」

「っ！衛兵！こやつを追いつけなさい！」

俺の話も聞かず華琳は衛兵を呼ぶ。

その声に反応した衛兵達が俺のことを掴み、城の外に投げ捨てる。

「ぐっ！」

背中を打ちつけたようだ…肺から空気が飛び出す。

…しばらく動けなかった。動けずに空を見ていた。

その空は綺麗な夕焼け空で、俺の心とは裏腹に何処までも透き通っていた。

「……………どうすればいいんだ」

俺の小さな呟きは誰にも拾われず、誰の答えも貰えないまま消えて行った。

「……………悩んでも仕方ないか……………」

そう呟くと俺は体に入れた重たい体を起こし、家へと帰って行った。

「……………はあ、これからどうしよう。……………お天道様、答えておくれ」

やけになって聞いてみたが当然ながら返事は返ってこなかった。

第14話（後書き）

ちなみにもし2番を選んだ場合は、

「華琳、君は本当に綺麗だね。まるで宝石のようだ。それなのにそんな怖い顔をしてしまったては台無しだ。だから華琳、君はいつまでも笑っていてくれ」

華琳はポカーンとした表情をしている。今がチャンスのようにだ。

そして俺は華琳の部屋から無事に脱出することができた。

後日、「護守！！貴様あ！！！！華琳様を誑かしおつて！！！！」

バサッ！俺は春蘭の渾身の一撃によりこの世を去った。

っていうような感じにしたいと思ってます。

第15話（前書き）

ここに出てくる金額は作者が適当に決めたものなので意味なんてありません。

読んでくれる人に感謝を

第15話

「……………」

華林と険悪なムードになってから一日が経過した。

俺が悪いのはわかるんだけど…どうすればいいんだ？

「……………」

俺の秘密を打ち明けようにもなにか影響があるかもしれないし…、
かといってこのまま過ごすのもなあ。

「……………はあ」

「…ねえ、そんな空気を出すんだったら外に出てくれない？」

杏に怒られてしまった。まあ無理もないか…、

重い体を起こし家から出て行こうとすると俺はあることをひらめいた。

「なあ、もし杏が誰かを怒らせて、話も聞いてくれない時ってどうやって謝る？」

そう！分からないことは他人に聞いてしまつのが一番なのだ！！

「なに？誰か怒らせたの？」

杏がにやにやしながら聞いてくる、

「ああ…ちよつと華林とね……」

正直に答える。

「へえ、華琳様とねえ」

杏：なにが面白いのか解らないけどこっちは真剣に悩んでるんだからな！

そんな気持ちが伝わったのか杏は真剣な顔になり、

「だったら贈り物とかしてみたら？」

「贈り物？」

贈り物か…うん、確かに効果はあるかもしれないけど…、

「華琳様だつて女の子なんだから首飾りとか腕輪を送ったら喜んでくれない？」

「でも、そんなもので釣るような真似してもいいのかな？」

「さあ？そこは護守の口次第じゃない？」

そんな無責任な…でも、これは試してみる価値があるな。

でも…女の子にプレゼントなんてしたことないからわかんないな…
…、

「杏、もしよかったら着いて来てくれないか？」

「私これから仕事あるから…ごめんね」

断られてしまった…しょうがないここは俺の感性を信じよう。

「それに他の人に聞くなんて反則よ」

見破られてたか…さすが俺の妹だな、

「じゃあ行ってくるな」

「頑張つて良いもの探すのよ」

そんな言葉を背中に浴びながら俺は市場へと駆け出した。

市場に来たのはいいんだけど…何処にそんな店があるのか分からないな…、

ここらへんは食料品売り場だしなあ。ん？おいしそうな肉まんが

あるな……。

…いや俺の使命を思い出すんだ！

俺はアクセサリを買いに来たのであつて食い物を買に来たわけではないはずだ。

…しかしうまそうだ………一個くらいなら大丈夫か…。

「親父いゝ、肉まんひとつよろしく」

「おお！万屋の坊主じゃねえか！久しぶりだな！」

そういつて親父は大きな肉まんをおまけしてくれた。やったね！

残金 10000→9950（日本円にして）

「おかしいなあゝ、ここでもないか…」

俺は今、焼き物の売り場にいるようだな…ここには用もないしさつさと帰ろうとすると、

ドスッ、…ガシャーン！

なんと子供にぶつかってしまい、

その拍子に子供は持っていた焼き物を落としてしまったようだ。

「ああ！お母さんに頼まれて買ってきた焼き物があゝ」

と言って子供が泣き出してしまった。

周りに人だかりができる…みんな俺のことを悪人のような目で見てくる。

「お、おい泣き止むんだ坊主！焼き物なら弁償してやるから！」

「ひく…本当？これ結構高かったよ？」

あれ…この坊主、俺が弁償するって言ったら眼が光ったぞ？！

これは当たり前屋みたいなものなのか…そう思いこの場を立ち去ろうとすると、

「うわーん！！」

と大きな声で坊主が泣き出す。周りの目が厳しくなっていく……、

「わかった！わかったから泣き止め！幾らなんだ？」

「2500くらいかな」

…2500？！それは法外すぎるだろう！そんなに払ったらさすがに…

そんな心を読んだかのように坊主が、

「うわーーーーーん!!!!!!」

さっきよりも大きな声で泣き出す。周りはもう俺に飛びかからん勢いだ……

「わかった!!ほら2500だ!これでいいんだろう?!!」

「うん。今度から気をつけてよねお兄ちゃん」

と言って帰って行く。だが帰り際に、

「へへ、ちよろいぜ」

と言ったのを俺は聞き逃さなかった。……畜生。

残金 9950→7450

おいおいどうなってるんだこれは?何か?今日は厄日か何かなのか?

いつの間にか市場の反対側にたどり着いた俺が目にしたものは、

「おい!金をだせ!!さもないとこの女の命はねえぞ!!!!!!」

なんと強盗だった。

「なあ、その娘を離してくれんか?その娘はわしの一人娘なんじゃ

…」

おじいさんの悲痛な声がする。しかし強盗は、

「そんなこと知るかあ！金だ！7000は用意しやがれ！！」

「そんなには無理だ！お願いだ、その娘を…」

まあ無理だろうな7000なんて大金は…しかし俺なら、

いやでもこれはプレゼント用なんだが…いやでも人命と引き換えには…、

しかし7000なんて大金を赤の他人のために使うなんて…いやでも…、

そんなことを考えてるうちに、

「助けてえー！！」

「うるせえ！黙りやがれ！！」

助けの声をあげる女の人を男が殴る。

…なにやってんだ俺は？…目の前の人助けを求めてるんだ。だつたら…

7000ぐらい惜しくもなにもないだろう！！

「おい！早くしないと本当に殺しちまうぜ？」

男が卑下た笑い顔を作る、

「ほら、7000だ。これで彼女を解放しろ」

7000を投げ渡す。それを拾った男は、

「アハハハ、こんな大金を渡すなんてテメエどっかの貴族のボンボ
ンかあ？」

と聞いてくる。

「さあな？…今そんなことが関係あるのか？」

「アハハハ、違いねえ！」

と言って女性を離し逃亡して行っ

た。追いかけようとすると横から、

「ありがとうございます。お陰で無事娘が帰ってきました」

「ああ、礼には及ばないさ、じゃあ俺は…」

あいつを追いかけようとする。しかし、

「本当にありがとう」

今度は人質の女性から礼を言われた。

「無事でよかったよ、それじゃあ…」

今度こそ追いかけてようとするが、

次は周りを人に囲まれてしまった。

みんな口々に褒めてくれるが俺は全くうれしくない！

「ちょっと退いてくれ！あいつが逃げちまう！！」

しかしみんな退く気配がない。なんだこいつら？、あいつとグルなのか？

…皆が退いてくれたのはあいつを完全に見失った後だった。

残金 7450→450

おいおいどうなってるんだよ？やっと着いたと思ったのに…、

なんで家出た時には10000あったのに今では450しかないんだよ？

自分の意思で買ったものなんて肉まんくらいだぞ？

450じゃアクセサリなんて買える訳がない…、

「はあ、何だっていうんだよ？俺が何をしたらっていうんだよ！！」

俺の叫びは空しく響いた。

「ん？おお、護守ではないか？どうしたのだ？」

声のする方を向いてみると春蘭と秋蘭と北郷がいた。

「…ああ、春蘭か…」

「なんだ？その残念そうな顔は？ただでさえ残念な顔なのにさらに残念な顔になっているぞ？」

…残念、残念うるさいな…ただでさえ今日は残念な日なんだから控えてもらいたいものだ。

それにしても北郷はうらやましいな、両手に花とは…畜生め…、

「それでどうしたんだ護守？なにか悩みでもあるのか？」

秋蘭が聞いてくる。しかしなんて言えばいいのだろうか…、

「……お金がないんだ」

「……はっ？」「」

そりゃそうだろうな…いきなりお金が無いなんて言われても困るだろうな。

「それは難儀だな…しかし私達もあまり持っていないくてな…」

「いや…借りたい訳じゃないんだけど…」

やはり最後の希望も潰えたか…なんか今日、運が悪いしこれは運命なんだろうか？

……いや、まだ諦めるには早いな…まだ日も高い。

まだ時間はある。だったら最後まで足掻かないとな！

運命なんて信じない！運命は自分の手で作り出すものだ！！

「じゃあなみんな！ちよつと走ってくるわ」

そう言つて俺は再び市場に向かって走りだした。

第15話（後書き）

前回もし1番の選択肢を選んでいた場合、

ちよつと鬱気味なので注意してください。

「あqwせdrftgyふじこlppおきじゅhygtfrですあ
qあzsxdcfvghnjmklilmknjbhvgcfdx
sぞ」

この世の言語ではない言葉を吐きながら俺は鳥が羽ばたく真似をし
た。

華琳は啞然としているようだ。その隙に俺は華琳の部屋から脱出し
た。

後日、「華琳？おはよう」

「ひっ！近寄らないで！」

…あれ？どうしたんだ？

「ああ、春蘭、おはよう」

「黙れ獣！！話しかけるな！！」

……なにか間違えたのかな？

「秋蘭、おはよう」

「……………」

シカとされてしまった…

「北郷…」

「ああ？！徐庶か？！すまん俺急いでるんだ！！」

そう言って駆け足で逃げに行った…

「杏……………」

「最低」

その一言を言うところかに消えていった。

……………鬱だ…死のう…

そう思っただけ俺は短刀を手に取り、

自分の首に突き刺した。

…こんな展開になると思いました…すごく鬱気味ですね…

第16話（前書き）

今日は祝日なのでもうひと作品ほど投稿したいと思っています。

あと初めての三人称に挑戦してみました。

読んでくれる人に感謝を

第16話

「まず…そうだな、あの坊主を探すか…」

そう思い、再び焼き物売り場にやって来たものの…いないな…、

「…やっぱりそう簡単にはいかないか…」

そう呟き帰ろうとすると遠くにあの坊主を見つけた。

柄の悪そうな男と仲良く喋っている。

近づいて話を盗み聞くと、

「今日の利益は4000だったよ」

「そうか、よくやったな息子よ」

…どうやらこいつらは親子のようだな。

「それにしても4000なんてすごいな…一体何があったんだ？」

「へへっ、それがね、馬鹿な男がいてさ、その男に吹っ掛けたら払ってくれたんだよ」

…誇らしそうに坊主が言う、…それにしても馬鹿な男って俺のこ
とか？

「そうか、それは良かったな！俺も会いたいもんだぜ！」

……よし！望みを叶えてやろうじゃないか！

後ろから近づき坊主の頭と男の首根っこを掴む。

「ほら、望み通り現れてやったぞ？」

「「げっ?!」「」

「…ちよつと話したいことがあるんだけど…いいよな？」

俺は笑顔で問いかける。

「「はい…」「」

肯定の答えが出たのでそのまま路地裏に引っ張って行く。

傍から見たら俺が悪者のようだが気にしない。俺には正当な権利が
あるのだ！

人気のない場所に着いたので親子を壁に投げ捨てる。

「「ぐへっ!」「」

「さて…俺の言いたいことはわかるよな？」

あくまで笑顔で問いかける。内心は怒りに染まってるけどな…

「いや…待ってくださいよ旦那あ、俺達にも生活ってもんが……」

「ん？何か言ったか？」

「いえ、なんでもありません」

どうしたんだ…俺の顔を見るなり土下座なんてして…そんなに怖い顔してるのか？

「じゃあ…金を寄こせ」

「はい、こちらになります」

そう言つて4000を渡してきた…なんか多くなっちゃったけどいいや…。

そして俺は次の獲物を探しに向かうことにした。

あれ？なんか俺悪役っぽいな…。

残金 450／4450

「さてと…次はあの強盗野郎だけど…」

とりあえず現場に戻って来たんだけど…やっぱりないか…

あたりを見回しても痕跡ひとつないな…。

しょうがない…こうなったら街を片っ端に搜索してやる。

そう意気込んでいると後ろから、

「おや？あなたはあの時の…」

「ん？ああ、あの時の親父さんか…娘は大丈夫だった？」

強盗に人質にされた娘の親父さんがいた。

「どうしたんですか？こんなところで？」

「いや…犯人に逃げられてしまったので搜索中です」

「それは災難ですね」

…ああそつだな…あんた達がいなけりゃ絶対に犯人を捕まえられたんだがな…、

……ここにいるとまた妨害を食らうかもしれないな…、

「じゃあ、俺は犯人を探してますんで失礼しますね」

「ああ！ちよつと待ってください」

足早に退散しようとする俺を親父さんが止めてくる。

……やはりこの親父さんは強盗とグルなのか？

そう思っていると親父さんは俺に袋を手渡した。中には2000が入っていた。

「……いや、こんなの貰えませんよ」

「いえ…あなたには娘の命を救っていただきました。それなのに何のお礼もしていませんので……」

そう言つて親父さんは去つて行つた…その背中は……とても大きく見えた。

「疑つて悪かつた……」

そつ呟き俺は強盗を探すべく街に繰り出した。

残金 4450／＼6450

「そろそろ時間切れか……」

日は落ちかけて今は夕暮れ時…店もそろそろ閉め始める頃だ。

周りには仕事終わりの一杯に来る親父たちでこった返している。

「とりあえず聞き込みから始めるか…」

情報を集めるとしたら古今東西やっぱり酒場だよね。

そう思い俺は酒場に入って行った。

「店主！ここら辺に卑下た面で、デブで、髭を生やしていて、いかにも小悪人って面の奴を見なかったか？」

「…ずいぶんとそいつのことを嫌ってるんだな…」

当り前だ、これでも言い足りないくらいだぞ？

「それなら…そいつじゃないのか？」

店主が指を指した先にはあの強盗がいた。

「そつだ…あいつだよ店主！」

強盗は大きな声で騒ぎ、他の客の迷惑になっているようだ。

「そうか…それならあいつをどうにかしてくれないか？正直困ってるんだ」

「ああ…任せてくれ」

そう言って強盗に近づき、胸倉をつかみ上げる。

「お客さん、他のお客様の迷惑なので外に出てもらえますか？」

「あつ！！俺は客だぞ？ちゃんと金も払って……………ってお前は！！」

強盗は俺の顔を見て酔いが醒めたようだ。

「ほう…覚えていたか…なら俺の要件も分かるな？」

そう言つて強く締め上げる。

「わ、わかつてます！お金なら返しますから許してください！！」

「そうか…それはいい心がけだな…」

強盗を離してやる。

「これが俺の全財産でさあ」

そう言つて渡されたのは3000だった。って3000？！

「…お前…残りの4000はどうした？」

「えっ？！そんなもん俺の腹の中に…痛い！痛いですよ旦那！！蹴らないでくださいよ」

おつといけない、無意識のうちに蹴ってしまっていたようだ。

蹴るのを止めてやる。ちょっとは気分が晴れたな。

「それで…残りの4000はどうするつもりなんだ？」

「そんなもの返せる訳が…わかりました！返しますから刃物を仕舞ってください！」

そう言われたので仕方なく刃物を仕舞う。

「それで？どうやって返すつもりなんだ？」

「そりやまた盗んで…いや働いて返します」

「わかればいいんだよわかれば…」

そう言っつて刃物を仕舞う。

「しかしお前、働き口なんてあるのか？」

あつたなら強盗なんてせずに働いていると思うんだが…、

「はい…今はありません」

「……ならこの店で働くといい」

店主が話に入ってくる。

「いいのか？店主？」

「なに…なかなか面白い奴のようだしな…」

そう言っつて店主が4000を渡してくる。

「これは？」

「こいつの給料の前払いつてやつさ」

店主が気前のいい笑い顔をみせる。

「あと…これが今回の謝礼だな」

さらに1000も貰えた。

「こんなに悪いな店主、じゃあ俺は急ぐから」

「おう！またな！」

酒場を後にして俺は、急いで装飾品売り場に向かった。

残金 6450→14450

「緊張するな…」

今俺は華琳の執務室の前に来ているんだけど…扉の前に立ち尽くしている。

なんというか…あれだ、悪いことした後には校長室に行くみたいな感じ…、

…落ち着くんだ…そうだ、俺は謝りに来たんだ…大丈夫、俺はやればできる子だから。

そう自分に自己暗示をかけていく。

贈り物も自分の感性を信じて選んだものだし、悪くもないと思う。

「……よし、行こう」

そう言つて俺は華琳の執務室のドアを開けた。

く華琳SIDEく

部屋で仕事をしていると誰かが入ってくる気配がしたので顔をあげてみると、

「や、やぁ華琳」

護守が入ってきたようね…なんの用なのかしら？

「なにか用かしら？」

興味もないけれど一応聞いておこうかしら。

「…やっぱりまだ怒ってるか…」

そう言って護守は箱を取り出して、

「えっと、これ…お詫びの品なんだけど…」

と言ってきた。……私を物で釣る気なのかしら。

そんな表情が出たのか護守は、

「いや！もので釣るような真似は良くないと思ったんだけど…どうしても伝えたいことがあってさ…」

伝えたいことってなにかしら？

「ごめん！俺の事は今は話せないけど何時か必ず話す！だから許して欲しいんだ！！」

そう言って護守は頭を下げた。箱を開けてみると見事な細工の腕輪が入っていた。

腕輪は赤と青と銀の模様が入ったもので、はめてみると私の腕にきれいに収まった。

次に護守の姿を見る。ところどころ汚れているところを見ると相当走り回ったみたいね。

…そんな姿を見ていると怒ってるこっちが馬鹿みたいじゃない。

「…はあ、顔をあげなさい護守」

「えっ?!許してくれるのか?」

「ええ、そのために来たんじゃないの？」

なんでそんなに驚いているのかしら？

「いや…華琳のことだから指の一本位けじめで持って行くものかと…」

「そう…そういうのが好みなのかしら？」

そう言っただけを構える。すると護守は、

「い、いやだなあ」冗談に決まってるじゃないか…」

…本当に謝る気はあるのかしら？

仕方がないので構えを解くと護守は真剣な顔になって、

「華琳、今は俺の秘密は話せない。けどそれは華琳を信用してない訳じゃなくて、話したら何が起きるかわからないからなんだ」

「ふふっ、わかったわ。なら話せるようになったら話さない」

「ああ、わかった！またな、華琳」

そう言っただけで護守は部屋を出て行った。

…それにしても、

「本当に見事な品ね…」

………そういえば感謝の言葉を言ってなかったわね…。

そんなことを考えながら私は仕事を再開することにした。

く華琳SIDE終了く

第16話（後書き）

三人称がすごく難しい！！全然書き方がわからなかった！！

主人公もなんか性格変わっちゃいましたし…

こんな駄文ですが読んでくださってありがとうございます。

第17話（前書き）

最後のほうにやつつけ感がありますが一応投稿しておきます。

読んでくれる人に感謝を

第17話

日も落ち切った帰り道、今日のことを振り返ってみる。

「いやゝなんだかんだあつたけど今日はいい日だったな……」

途中是最悪だったけどな……当たり屋に狙われたり、強盗と遭遇したり、

北郷がモテモテなところを見せ付けられたり……。

北郷が両手に花の時には殺意すら芽生えたけどな……まあよしとしよう。

「ただいま」

「お帰り〜、どうだった？」

杏が楽しそうに聞いてくる。

「ああ、成功したよ。ありがとな杏！」

そう言つて杏の頭をぐしゃぐしゃにする。

「ちょっと止めてよ……／＼／＼」

恥ずかしそうに杏が言つので止めてやる。

「そうだ、はいこれ」

そう言つて箱を渡す。

「えっ？なにこれ？」

「いいから開けてみるって」

にやにやしながら箱を開けるように急かす。

杏が箱を開けると中には腕輪が入っていて、

その腕輪はピンクを基調とした可愛いものだ。

なぜか家を出た時よりも金額が多くなったので購入したものだ。

「今日のお礼だよ…ほら、杏が案を出してくれなかったら華琳と仲直り出来なかったかもしれないし…」

途中で恥ずかしくなってそっぽを向いてしまう。

「……………ありがとう」

ぼそりと杏が呟いた言葉を俺は聞き逃さなかった。

杏の方を見ると、杏は腕輪の入った箱を大事そうに抱えている。

いやゝ頑張つて選んだ甲斐があつたもんだね！

だが、俺のプレゼントはまだ終わらない！

「あとさ、いつも杏が家事とかしてるだろ？だから今日は俺がするな」

「えっ?!」

杏が抱えていた箱を落とす…せつかく買ったのに…気をつけてほしいものだ…。

「そんなに驚いてどうしたんだよ？」

気になったので聞いてみる。

「い、いや…あのね…うーんと…なんていうか…」

…まあいい、なんか気になるけど料理を開始してしまおう。

そして俺は料理をするべく台所に立った。

（杏SIDE）

どうしよう…護守が料理を始めちゃった…。

前回の料理は料理なんて言えるものじゃなかったけど……、覚えて

ないの？

でも…あんなに自信がありそうに作ってるんだから大丈夫よね？

「まずは…そうだなお吸い物を作るか…」

お吸い物か…それなら簡単だし食べられないものにはならなそうね。

「とりあえず…水の中に鶏をぶち込むか…」

待つて！鶏を生のまま入れたら血の味しかないものになっちゃう
つて…！

まずい…始めからとてもまずい…ここは早く変わって貰わないと！

「護守？気持ちは嬉しいけど…大丈夫だから変わって？」

最後の望みをかけて聞いてみる。しかし、

「ん？大丈夫だ杏。めちゃくちやうまい物食わせてやるから待つて
てくれ」

…その自信は何処から出てくるんだろう？

……しょうがないので大人しく料理の出来る様を見守ることにする。

「あとは…とりあえず野菜を入れておくか…」

護守は見たことのある野菜から見たことのない野菜まで適当に入れていく。

…って待って！今雑草を入れたよね！なんで雑草なんて入れるのよ？！

「よし！…これは火にかけて放っておこう」

…なにが、よし！なんだろう？確実に、駄目！だと思っただけど…、

「次は…買ってきた豚肉と牛肉を使うか…」

豚肉と牛肉？！なんでそんな高級な物買ってきたの？もったいない…、

「うゝん…面倒だな…塩まぶして焼くだけにするか…」

ああ…あれがこの料理のなかで一番まともかもしれない…。

「火力は…もちろん最高だな…中華は火力だって言うし…」

訂正…あんなものただの消し炭ね。料理なんかじゃないわ。

「ああ！忘れてた！！お吸い物の中にこれを入れないと…」

そう言っただけで護守は見知らぬ粉を入れようとしている。

「ちょっと待って！それは何？！」

そんな怪しいもの料理…じゃないけれど入れさせる訳にはいかない！

「ん？これか？これは怪しい商人から買った料理がおいしくなる粉

だ」

料理がおいしくなる粉？なんなのそれは？

っていうか怪しい商人から買ったって…絶対に危ないものでしょう！？

「そんなの入れて大丈夫なの？！」

もうすでに駄目駄目な状態だけどね…、

「平気だって、なんか効能もいいみたいだし…」

そう言っって護守はお吸い物？のなかに粉を入れる。

するとお吸い物が紫色に変色した……紫？

「……………護守？これどうするの？」

私達は鍋の中の物体を凝視している。

「…大丈夫だろ…食ってみたら意外とうまいかもしれないし…」

…冷や汗を垂らしながら言う台詞じゃないと思うけどね…、

「……………さて、早くよそっちまおう」

こうして護守作の晩御飯が完成した。

杏SIDE終了

どうしてこうなっちまったんだ？

今日の晩御飯は俺が腕によりをかけて作ったはずなのに…、

まず一品目がローストビーフを意識した肉料理の…but…こんな
ただの消し炭だ。

二品目はそこらへんで拾った雑草を盛り付けただけの簡単料理…こ
れが一番マシに見える。

三品目はスープのはずが……なんなんだこれは？…こんなただの紫
色の物体だ。

自分で作って驚きの逝品達だ。

食卓はいつもの騒がしい感じではなくお通夜のような感じになっ
ている…。

杏も俺も食卓の上にある物体に釘付けになっているようだ…もちろ
ん悪い意味で…。

「……………ねえ…本当にどうするの？」

その声は村を焼き払われた時よりも沈んだ感じた。

「…た、食べてみないと分からないだろ…」

そう言って俺は紫色の物体を口に近づける。

あ…やばい…臭いだけでぶっ倒れそうだ……。

なんていうか…血の臭いと牛乳の腐った臭いと納豆の臭いと鶏の臭いと正体不明の臭いがする。

多分この正体不明の臭いが例の粉だろうな…。

その殺人臭を我慢して紫の物体を口の中に入れてみた……。

そこで俺の意識は途絶えた。

〈杏SIDE〉

「ちよつと護守…！大丈夫？…！！」

護守は紫色の物体を口にした瞬間にビクンと痙攣し、そのまま床に倒れてしまった。

慌てて護守のそばに行き脈を測る…どうやら生きてはいるようだ…よかった…。

「だから料理なんてしないでって言ったのに…！」

前回も同じような目にあっただから覚えておいてよね！

…ああ！護守の顔色が紫色に！！速く！速く医者に連れて行かないと！！

護守を背中に担いでお城を目指す。

「……………」

護守がうわ言のように何かを呟いた。

「どうしたの護守？」

止まって呟きに耳をすませると、

「やめろお…親父い…俺に近づくな…その紫色の物体を捨てるんだあ…」

なんて言葉を呟いていた。

「まずい！速く医者に診せないと！！」

そう言っただけで私は全速力でお城へと向かった。

杏SIDE終了

やめるんだ親父、俺を引っ張って行ってどうするつもりなんだ？

えっ？川を渡るだけ？ふざけるな！俺はまだ死にたくない！！

…ああ！親父！！その紫色の物体を何処から取り出したんだ！！！

やめろ…近寄るな！！何笑ってんだよ親父い！！！

待て…落ち着くんだ親父！！そんなことしたって何にもならないぞ
！！！！

……やめてくれ！！その紫色の物体だけは…

「やめろおおおおお！！！！！！！！！！」

はっ？！なんだったんだ今の夢は？！妙にリアルだったんだが…、

…本当に夢だったのか…いやいや、夢に決まってるだろう！！

そっじゃなきゃ親父と会えるわけがな…ん？腕に何か書いてあるな…

なになに…いつでも待つてるぞ……そんな馬鹿な…、

目を擦ってもう一度見てみるとそんな文字は何処にも書いていなかった。

「護守！もう大丈夫なの？！」

「うひゃあ――!!」

華琳?!…驚かせないでくれよ…危つく親父の所に行くところだったぞ…。

華琳の後に春蘭と秋蘭と杏と北郷と医者がいた……医者？

「ああ、…それでなんで俺はここにいるんだ？」

「えっ?!覚えてないの?!」

どうしたんだ杏?そんなに驚いて…、

「杏が城に来てな、護守のことを診て欲しい…と言われて急いで医者に診せたところ…」

診せたところどうなったんだ秋蘭?大事なところで話を切らないでくれ。

「なんでも毒物を摂取した疑いがあるそうよ。…なにか心当たりはあるかしら？」

毒物?!…心当たりなんてないな…確かあの晩は…どうしたんだっけ？

「ねえ護守?本当に覚えてないの？」

「ああ…さっぱりだ」

「……………はあ」

…なぜか杏にため息をつかせてしまった。なんでなんだ？

「それで医者に診せた後にこの部屋で三日間看病してやったという訳だ」

春蘭が胸を張って答える。……三日間？

「なあ…俺って三日間も寝たきりだったのか？」

「ええ、うわ言で親父がどうか、紫色の物体が、とか何とかいろいろ呟いてたわよ」

華琳が俺の質問に答えてくれた。それにしても三日間も寝たきりだったとは…

……ん？…紫の物体？…なにか思い出せそうだな…あと少しなんだが…。

「もう大丈夫なのか？尋常じゃないくらい顔が紫色だったぞ？」

北郷が心配そうに聞いてくる。

「ああ、もう大丈夫だ」

笑いながら答える。

「そうか…」

北郷が胸を撫で下ろす。……いい奴だな。

…あと少しで思い出せそうなんだが…何か情報はないのか？

「毒の種類はまだ特定されていませんがおそらくかなり強力な毒でしょう」

強力な毒か…よく生き残れたな。ん？杏はなんでそんなに残念そうな顔をしているんだ？

「……………ああ！！思い出した！！！」

そつだ！確か俺が料理を作ったら紫色の物体が出来ちゃってそれを食べたら……、

……………すごく恥ずかしいな…自分の料理で死ぬなんてことにならなくてよかった。

「それで犯人は誰なの？！」

ああ華琳…必死になってくれるのは嬉しいんだけど…、

…この場合はそつとしておいて欲しいかな。

杏に目で助けを求めてみたが目を逸らされてしまった。

「えっと…犯人は………」

「………犯人は？」

…そんなに期待しないでくれよ……すごく言い辛いじゃないか。

「…………俺の料理だ」

「「「……………はあ？」「」「」

そりゃそうなるよね、俺だって同じ反応するし…、

…………杏！助けてくれ！！

今度は通じたのか杏が助けを出してくれた。

「えっと…護守の料理は料理と言えないもので…そこに未知の粉を入れたせいだと思います」

「…つまりその未知の粉が毒物だったのかしら？」

そうだ！そういう可能性もあるじゃないか！！ナイスだ華琳！

「いえ、それはあり得ません」

「なぜそう言い切れるんだ？」

尤もな意見だな…さすが秋蘭だ。

「さっき野良犬にあげてみましたが特に変化はありませんでした」

…動物実験とは…………末恐ろしい妹だ…。

「つまり、…どういうことだ？」

「つまり未知の粉には何の毒性もなく、護守の料理がいけなかったということだよ」

秋蘭…そんなバツサリ言わなくてもいいじゃないか……。

「杏、そんなにひどいものなのかしら？」

「……………はい」

杏…ちよつと位庇ってくれてもいいだろう…。

「そう…心配して損したわね…行くわよ」

「はっ」「わかった」

そう言つて華琳達は去つて行つた。

「じゃあ私も帰るから」

杏も帰ってしまった。

「では、僕も仕事がありますので」

医者すらも帰ってしまった。

「……………絶対に料理をうまくなってやる」

俺は決意を秘めて再び眠りについた。

第18話（前書き）

投稿が遅くなってしまう申し訳ありませんでした。

学校が始まってしまい、小説を書く時間が取れなくなってしまいました。

できるだけ努力するつもりですが、

前のようなスピードでは行けないと思います。

読んでくれる人に感謝を

第18話

夢を見た。

俺の住んでいた村が焼き払われ村人達が逃げ惑う。

その中心で俺はその光景を見ていることしかできずにいる。

助けるために触れようとしてもその腕はすり抜けて行く。

しばらくすると親父が賊に切り殺される。

親父は倒れた後に俺のことを恨めしそうに睨む。

その視線に耐えきれずに目を背けると辺りは炎に包まれておらず、

真っ暗な闇の中で俺が殺した人たちが睨んでいる。

四方八方を囲まれ俺はその視線に耐えきれなくなり懐の短刀に手にかける。

そして……………、

「…ん…もう朝か…」

そう言って体を起こす。

それにしても…久しぶりにあの夢を見たな…。

最後に見たのは2年位前だったかな…、

もう昔の話だっていうのにまだ吹っ切れてないのか…、

まあ華琳達と出会うまでは暗殺業をやってたからそんな昔って訳でもないけど…、

「…やっぱり、この短刀のせいなのかな…」

そう言っただけにある短刀を取り出す。

確かに持っていて気持ちのいいものじゃないけど…結構付き合いが長いんだよな。

この短刀って結構いい品物だし愛着もあるんだよな………怨念とか籠ってそうだけど…。

「…まあ、これも一種の戒めだよな」

そう言っただけ俺は懐に短刀を戻し、自分の体の調子を確認する。

…よし、胃の調子もいいし、吐き気もしないし、手足の痺れも取れてるな。

三日も寝たから気だるいが、後遺症もないようだしもう帰っても大丈夫だろう。

そう結論付けてベットから立ち上がる。

「そつだ…華琳達にお礼を言いに行かないとな」

そんなことを呟きながら俺は華琳達を探すべく城を探索することにした。

「…あれ？俺ってこんなに方向音痴だったのか？」

華林の執務室に向かっていたはずなのに気付いたら中庭に来ていた。

…前から思ってたけどまさかここまでとは…引き返すか…。

そう思っていると中庭の方からものすごい風切音が聞こえた。

気になって覗いてみると春蘭が一心不乱に鍛錬をしていた。

…邪魔するのは悪いし退散するしよう。ここにいると面倒事に巻き込まれそうだし。

……いや、せつかく見つけたんだしここはお礼を言いに行った方がいいんじゃないか？

いくら春蘭だといってもそんな簡単に危険な目に遭う訳がない………
…と思うし。

それに春蘭だつていきなり攻撃して来ないって俺は信じてるし……
…多分だけど。

…いやいや、別に殺しに行くって訳でもないんだし大丈夫だろう。

…でもなんとなく嫌な気がするんだよな、しかしお礼は言わないといけないし…、

……なんでお礼を言いに行くだけなのにこんなに悩まなきゃいけないんだ？

別に悪いことしたから謝るって訳でもないのにすぐ行く気が起きないんだけど…。

……しょうがない、行くか。すごく嫌な気がするけど…。

「おーい、しゅんら」

「っ！何者だ！！」

俺の言葉も言い終わらないうちに春蘭の怒声が響き、

同時にものすごい速さ大剣を振るってきた。

その大剣は俺の顎先を少し切り裂いていった。

……もう少し下だったら喉を切られていたな…危なかった。

まあこれでも十分に危ないけど想定した怪我の一割程度で済んだな。

最悪死ぬ可能性も考えてたし……。本当に死ななくてよかった。

それにしてもやっぱり春蘭は春蘭だったな……。

「ん？護守ではないか、もう体は大丈夫なのか？」

…… たった今剣を振るった相手とは思えない口ぶりだな……。まあ春蘭だしいいや。

「ああ、おかげさまですっかり治ったよ」

「そうか、それはなによりだ」

ちよつとだけ安心したような声で言ってくれた。

その言葉で俺自身も幸せな気持ちになった。

でも春蘭のせいで怪我増えたんだよな、……。なんか一気に幸せが逃げた気がする。

……まあ看病してくれたのは本当なんだしちゃんとお礼しなきゃな。

「それでお礼を言いに来たんだ」

「お礼？」

「俺が倒れている時に看病してくれたんだろ？だからありがとな」

素直にお礼を言う。すると春蘭は、

「よ、よせ、なんだか照れるではないか」

なんていつて顔を赤くしている。

…しかし驚いたな。まさか春蘭が顔を赤くすることがあるとは…。

ただの猪武者だと思ってたんだが……人は見かけによらないってことかな。

「ん？護守、なにか変なことを考えなかったか？」

「えっ！？…別に考えてないけど」

……まさか考えてることまで分かるとは。さすが春蘭だな…。

…なんかこのままここにいと鍛錬に付き合わされそうだし……早く逃げるか。

「じゃあ俺は他の人にもお礼を言いに行かないといけないから。鍛錬頑張ってな」

そう言つて俺は足早に中庭を後にする。

後ろから声が聞こえるが気のせいだと信じて行くでしょう。

さて…次は何処に行こうかな…。

「……………ここは秋蘭の執務室か…」

…おかしいな、確か俺は華林の執務室を目指していたはずなんだが…。

やっぱり途中で食堂に入ったのがまずかったのかな？

あそこで方向がごちゃごちゃになっちゃし…今度から気を付けることにしよう。

…それにしてもあのシュウマイはともうまかったな。また食べたものだ。

「秋蘭、いるか？」

無断で部屋に入って怒りを買い、矢で射られたくないから声をかけておく。

「ん？…護守か、少し待っていてくれるか」

部屋の中から返事が聞こえたのでしばらく待つことにした。

…そういえば俺が倒れた原因ってなんだっただろうな？

確かにあれは料理なんて言える代物じゃなかったのは確かだけど、

それでもスープが紫になるなんておかしいと思うんだよね。

しかも前の世界では一人暮らしだったから料理も出来ていたし、

でも杏はあの粉にはなんの毒性もないって動物検査してくれたしな……。

ってことはやっぱり俺の料理せいかな……こんど杏に料理を教えるもらおうかな。

……………それにしても遅いな……もう10分ぐらい待ってるんだが……。

何かあったのかと思い部屋の中に入ろうとすると、

「悪かった護守、待たせたな」

と言って部屋の中から出てきた。それは良かったんだが……、

「……………秋蘭もしかして風呂上がり？」

「ああそつだが……なにか問題でもあるのか？」

……………問題？そんなのたくさんあると思うけどな。

まずその姿、ちょっと頬が赤く染まっっていて色っぽいし、いい匂いもする。

そして男に見せることを危険と思わない精神。これが一番の問題だ。

俺のことを信賴しているって意味なのかもしれないけど…。

俺も男なんだからさ… もうちょっと警戒しないと危ないと思うんだよね。

……こんなことだったらさっさと部屋の中に入ればよかったかな…。

そんなことを考えていると秋蘭が、

「…護守、そんなことを考えない方が身のためだぞ」

なんて言葉をいつものクールな表情で言ってきた。

その言葉を聞いた俺は思わず、

「すいませんでした！」

と綺麗なお辞儀をしてしまった。

…それにしてもなんでバレたんだ？ 顔に出ちゃったのか？

まさか本当に考えが読めるなんてことはないだろうし…、

いやでも秋蘭なら……さっきも春蘭に考えを読まれたし…。

考えてる時間が長かったのか秋蘭が心配そうな声で、

「それでもう体は大丈夫なのか？」

と聞いてきた。俺は頭をあげて、

「ああ、もう大丈夫だよ」

と言うと秋蘭は安心したように、

「そうか、それは良かった」

と言ってくれた。

その言葉が嬉しくて自然に感謝の言葉を口にした。

「だからお礼を言いに来たんだ。看病してくれてありがとな秋蘭」

「別にかまわないさ、私達は仲間だからな」

秋蘭がほほ笑みながら言う。

仲間か、そんな風に呼ばれるとなんだか嬉しいものだな。

でも…俺にはそう呼ばれる資格なんてないだろうな……。

罪の重さに潰されそうな俺。戦う理由の無い俺。人を殺すことを拒絶している俺。

こんな俺では到底華琳の手助けなんて出来やしないだろう。

でも華琳達の手助けをしたいのも本当で、

この世界のみんなの平和のために戦いたいと本気で思ってる。

それでも戦うのが怖くて…人を殺すのが恐ろしくて……、

そんな考えが頭の中をぐるぐると回り続け気持ちが悪くなる。

「……はあ、護守」

黙っている俺を見かねたように秋蘭がため息を吐き、言葉を続ける。

「確かに考えるのは良いことだとは思うが、考えすぎるのもどうかと思うぞ」

……確かに最近は妙に深く考えることが多いな…。

「そんなに考えても答えが出ないのであれば、行動してみるのも一つの手だと思うぞ」

行動か…それも尤もだな。悩んでばかりなのは気分が悪くなるし、少し荒治療気味だと思っけど行動することによって何らかの答えを得られると思うし。

そう思うとなんだか気持ちが悪くなった気がするな。……結構俺って単純なのかな？

…そういえば前にも悩みを軽くして貰ったな……迷惑かけてばっかりだな。

「そうだな…ありがとう秋蘭、気分が良くなったよ。今度ちゃんとお礼するな」

「ああ、楽しみにしているよ」

そう言い俺は次の場所に向かって歩き出した。

「うーん、気持ちいいなあ」

大きく息を吸いながら体を伸ばす。

城の2階のベランダのような場所から空を見上げると太陽は真上に位置していた。

風は心地よく、気温もちょうどよく絶好の行楽日和と言える陽気だ。

街を見てみると桜の花が咲いていて多くの人が花見を興じているようだ。

その様子は活気に満ちていてこの街の強さを見ているようだ。

「もう春か、時間が経つのは早いな」

なんて年寄りみたいな言葉を軽く笑いながら呟く。

下を見てみると中庭で春蘭と秋蘭が兵士たちを訓練している。

みんなこの街を護るために必死に訓練している。

「みんな頑張ってるなあ」

… だけど春蘭、ちょっとは手加減してあげないと兵士が死んじゃうと思うぞ？

もう兵士さんみんな怖がってるよ……俺が巻き込まなくて良かった…。

あんな訓練に参加したら敵と戦う前に味方に殺されるかも知れないし……、

もしそうになったら死んでも死にきれないだろうな…。

……… それにしても、

「なんで俺ここにいるんだろう？」

俺は真面目に華琳の所に行こうとしてたのに、なんでこんな所に出てきちゃったんだ？

いつもはちゃんとたどり着けたはずなんだが……まあいつか会えるはずだしいいか。

そう思い俺は昼の陽気を一通り満喫したあと、次の感謝の相手を探すことにした。

第18話（後書き）

最後は思っていた構想とまったく違うものになってしまいました。

頭で考えているものを文章にするのってすごく難しいと改めて実感しました。

おかげでまた最後がやつつけ仕事になりました。

これから精進していきたい所存です。

第19話（前書き）

久しぶりの投稿ですね……

今回は結構長めになってしまいました。

読んでくれる人に感謝を、

第19話

「はあゝ…もういやだ」

もう何回目の厨房だと思ってるんだよ…3回目なんだぞ…もぐもぐ。

このままじゃ一生たどり着けないような気がしてきたな…もぐもぐ。

ここまで来ると最早呪いだな…いや呪いなんてある訳ないけどね…もぐもぐ。

まったく…そんな呪いとか幽霊なんてものがあつて堪るか！

そんなものは信じません！絶対に信じません！！

最近、突然右肩が重くなったり、真夜中に足音が聞こえたりするけど信じない。

ああ…背中が寒くなってきた…この話題は考えるのやめようかな。

それにしてもこの焼売は絶品だな。さすがに魏の料理人の腕は違うな…もぐもぐ。

これを食べると自分が方向音痴だつて事も忘れられそうだな…もぐもぐ。

「…それにしてもままならないものだな…」

「なに格好付けて言ってるんですか…」

俺が小さく呟くと後ろから呆れたような声が聞こえた。

その声の方に振り向くと、

「ああー！！なんで焼売こんなに食べちゃってるんですかー！！！！」

なんて大きな声で叫びだした。

「…あれ、もしかして拙いことした？」

「当り前ですよ！これは曹操様達の料理なんですよ！！」

「…えっ華琳達の？…なにかの冗談だろ…もし本当なら俺、殺されるんじゃない？」

「……マジで？」

「マジですよ！」

「…拙いな。とても拙い…このことが華琳達に知られたら…首が飛んでいくな。」

さすがに首は飛ばないか…多分ボコボコにされて終わりだろうな…それも嫌だけど。

「どうするんですか徐庶さん！このままじゃ私も仕事クビになるかもじゃないですか！」

そう言って泣きそうな顔で俺の肩を揺らしてくる。

確かに俺が全般的に悪いと思ってるんだけど…この速さは拙い…早く止めさせないと…。

「とりあえず落ち着いてくれ…うぶ」

「落ち着ける訳ないじゃないですか！」

俺の言葉も空しくスピードは更に上がっていく。

いや…落ち着いてくれないと胃の中の物が…うぶ…駄目だ…そろそろ限界だ。

拙いぞ…本気で拙い。このままだと本当に大変なことに……。

「大丈夫だ！俺が絶対に何とかする！！」

だからとつと肩を揺するのを止めてくれ……！！

後半の方は声にならなかったが心からの願いを込めて叫ぶ。

すると俺の言葉と願いが通じたのか肩を揺するスピードが落ちていく。

そして料理人は俺の肩から手を離し、諦めたような顔で、

「何とかするって…どうするんですか？」

と聞いてきた。

その言葉に俺はとりあえず体の調子を整えて、笑みを浮かべながらこう言った。

「まあその前に作戦会議だ」

こうして図らずも俺と料理人の今後の人生を賭けた戦いが始まったのだ。

えー現場の徐庶です。現在の焼売飲食事件の作戦会議の様子をお伝えしたいと思います。

ただいま護守は料理人こと燕里^{えんり} / 運命共同体なので真名を交換したノと

食べて減ってしまった焼売を挟んで座っています。

その様子は極めて真剣で、その気迫がこちらにも伝わってきます。

まさに人生を賭けた戦いだとおも……。

「突然頭を振りだしたりしてどうしたんですか？」

「なんか変な電波を受信したって言うか何と云うか…まあ気にしないでくれ」

だからそんな可哀そうな目で俺を見ないでくれ。

「…まあいいです。早く作戦を練りましょう」

だからその目を止めてくれって！そんな虫けらを見るような目で俺を見ないでくれ！

そんなに見られると脆い俺の心では耐えきれないほどのストレスを抱えることに…。

こうなったら早く良策をだして見直してもらうしかないか。

早くも折れそうな心を励まし、情報を集めることにした。

「まず…あとどれくらいで配膳するんだ？」

これが分からないと作戦もなにもないからな。

「そうですね…あと20分ほどですね」

20分か…短いな…あまり作戦を練る時間もなさそうだしな…。

そんな俺の厳しい表情を見た燕里が諦めたように、

「やっぱり無理ですよね……」

そう呟いてがつくりと肩を落とした。

いやいや、確かにちょっと厳しい顔したけどさ…

もう少し俺のこと信じてくれてもいいんじゃないかな？

そんなリアクションを取られると何としても助けがないと思って思っちまうじゃないか。

「なに肩落としてるんだよ…燕里は俺を誰だと思ってるんだ？」

不敵に笑いながら自信満々に言う。

そんな問いかけに燕里は困ったように答える。

「誰って…食い意地の張った人とか…」

……食い意地の張った人？この俺が？んな訳ないじゃないか。

確かに焼売食べたのは俺だけど…

別に腹が減ったから行った訳じゃなくて、偶々着いちゃっただけだし…。

そりやつまみ食いは止めた方がいいかなあ…とか思ってたよ。

でもいい匂いがしてその料理を食べないのは料理に対して失礼だと思っただよな。

なにが言いたいのかって？…結局食い意地が張ってるかもってこと

だよ。畜生。

「いや…食い意地とかじゃなくて俺の職業をだな…」

俺も困ったように言葉を返す。

すると燕里は思い出したようにあつと声をあげて、

「確か…万屋でしたよね」

その言葉に再び自信満々な顔をして話す。

「そうだ。俺は万屋で、燕里は俺の依頼人っていう訳だ。そして俺は依頼を受けたなら

絶対に完遂する。だから燕里は俺の事を信頼しててくれ。そうしてくれたなら俺は必ず依頼を成功させてみせるから」

そう言つて燕里に笑いかける。

内心では少し格好つけすぎたかな？と思い、

恥ずかしい気分になっているが笑みだけは崩さないようにした。

すると燕里はしばらくうつむきながら肩を上下させた後に、

「アハハハハ！護守さん格好つけすぎですよ！」

堪え切れずに嘖き出し、大笑いしながらそんなことを言いだした。

それにしてもあんまりだな…。

こっちは燕里を元気づけようとしてあんな恥ずかしいことを言ったのに……。

いや確かに恥ずかしい台詞だったけどさ、そんなに笑う事無いんじゃない？

「それに元はと言えば護守さんが焼売食べちゃうからいけないのに、信頼してくれって

アハハハハ！」

燕里は涙目になりながらも笑うのを止めずに笑い続けている。

その言葉に俺の顔は赤くなる。もちろん恥ずかしさでな！

それにしても奇遇だな、俺も今涙目になりかけているところだよ。お前のせいだな！

あーやばい、顔が熱い。確実に顔赤いよね。なんでこんな状況になってるんだ？

ああ…もう嫌だ。そりゃ笑って欲しいとは思ってたけどここまで笑われると最早いじめだよ。

「アハハ…ああ、笑いすぎました。すいません」

燕里が涙を拭いながら謝罪する。しかし笑いながらなので誠意を感じられないな。

「…ああ。本当にな」

俺は不機嫌に返答する。もちろんまだ顔は赤いまんまだ。

そんな俺の返答を聞いて燕里は少し頬笑み顔になり、

「そんなに不機嫌にならないでください。格好良かったですよ」

なんて事を言ってきた。そして俺はそっぽを向いて答える。

「……ありがとな」

……でもそんなに直球で言われるとそれはそれで恥ずかしいんだけどな。

まあ、さっきみたく笑われるよりかは全然マシだけどね。

ちらりと燕里を見る。

その顔にはさっきまでの諦めたような表情はなく、笑顔になっていた。

こういう顔を見ると人って笑顔が一番だと思うよね。

男も女も笑顔だと何倍も魅力的に見えると思うし。

いやー、恥ずかしい思いした甲斐があったってもんだな。

二度としたいとは思わないけどやって良かったって心から思えるね。二度とやらないけど。

そんな事を考えているとまたしても大きな声で燕里が叫びだす。

「ってこんなことより早く作戦考えてくださいよ!」

「…あつ」

「……あつて言いましたよね?!絶対に忘れてましたよね?!」

「い、いやだなあゝ、俺が忘れてる訳無いじゃないか」

拙い…完全に忘れてた。どうしよう…。

折角笑顔だったにこのままじゃまた蔑まれた目で見られちまうじゃないか。

ああ!燕里の顔が虫けらを見る目5秒前だ!

「さねも「そんなことより早くしないと時間が無くなっちまうぞ!」

燕里が喋っている途中に急いで言葉をかぶせる。

適当に言った言葉だがすでに10分ほど経過しているのも事実なのだ。

すると燕里の表情も蔑むような表情から焦った表情に変わり、

「そうでした!早く話し合わないと!」

よし!何とか話題を逸らすことに成功したな。

そう自分の心の中で勝利を噛みしめていると燕里が思い出したように、

「でも、もとはと言えば護守さんが「焼売は一人いくつの予定だったんだ?!」」

急いで質問をぶつける。

燕里はどれだけ俺の事責めたいんだよ?! もう時間が無いって言ったよね?!

「えっと…一人7個ずつですね」

……7個か。確か残りが22個あったな。

食べる人は華琳、春蘭、秋蘭、北郷の4人だからこのままだと一人5・5個になるのか。

ちなみに俺が食べた数は6個だからもう1個食べたら一人分だったな。意味は無いけど。

「足りない分はまた作り直せばいいんじゃないか？」

一番簡単で手っ取り早い解決策を提示する。

もしこれが出来たら数は揃うし、味もおいしく、みんな幸せになるんだが…。

そんな儚い希望と共に投げかけてみるが燕里は首を横に振ったあと、

「今から作り直すには時間が足りませんよ……」

と残念そうに言う。俺はその言葉を聞いた後少し残念そうに話す。

「うーん……やっぱり厳しいか……」

まあ予想はしてたからそこまで残念って訳でもないけどね。

残り時間はあと7分くらいかな……早く決めないとそろそろ拙い時間になって来たな。

真剣に考えてみる。すべての情報で検討し、いろいろな案を出しては潰しを繰り返す。

しばらく考えると俺の頭の中に一つの良案が浮かんだ。

「……俺に一つ案がある」

この案は危険を伴うが、成功したならすべてがうまく行く。いわば博打の様な案だ。

俺の真剣な雰囲気を感じたのか燕里も真剣な表情で聞き入る。

「この方法は失敗したら打ち首確定の大博打だ。それでも……俺はやる価値があると思う」

辺りが静寂に包まれる。

燕里はこの方法の危険性と聞いて怖気づいていたが、しばらくする

と覚悟を決め、

「……解りました……私も覚悟を決めます。…その方法とは一体何ですか？」

燕里の目を見てみるとそこには料理人の目ではなく一人の戦士の目になっていた。

…なんでつまみ食い程度で戦士の目なんかになってるんだ？

確かに大事だけどそこまで覚悟決める必要はないんじゃないか？

なんかこのまま謀反とか起こしても不思議じゃない雰囲気醸し出してるんだけど……。

……まあ折角固めた決意を鈍らせるのも無粋だし、俺も乗ったほうがいいかな。

そう思い俺も燕里に倣い、決死の覚悟で方法を説明する。

「その方法とは……俺も一緒に焼売作って「却下です!!」……………え？」

……………え？

突然の事に驚いて思考が停止する。

とりあえず燕里に疑惑の目を向けておくことにした。

その視線を受けた燕里は困惑と焦りが混ざったような声で、

「そんな目で見ないくださいよ！護守さんはどうして倒れたか忘れたんですか？！」

どうしてってそりゃ……………自分の料理のせいだけど……………あれは違うんだよ！

あれは…なんて言うか……………そう！悪ノリしすぎたせいなんだよ！！
おいしく作ろうとして頑張った手間が結果として全部裏目っただけなんだよ。

だから別に普通に作れって言われたら作れると思うよ。……………自信ないけど。

「それは…俺の料理のせいだけど…大丈夫だって、ちゃんと作るから」

そう根拠も自信もないことなのに頼んでみる。

迷ってるときにチラツと聞いた話だと俺には、

自分の料理で瀕死になった万屋の馬鹿…なんて不名誉な称号が付いたらしい。

……やはりここは俺の名誉のためにも焼売をおいしく作っておきたいところだな。

そうすれば俺の不名誉な称号も消えるだろうし…よし頑張ろうかな。

そう心の中で息巻いていたが燕里の返答は、

「駄目に決まってるじゃないですか！！死人を出すつもりですか？
！」

と言う散々な結果だった。

って言うか死人はないだろ死人は……行っても重体者までだって……
……それも拙いか。

まあ俺が作った料理で華琳達が倒れたら後味悪いし、

もしそんなことになったら確実に打ち首だしやらない方がいいだろうな。

そう考えて諦めることにした。

「でもどうするんだ？もう時間もないしそろそろ決めないと拙いぞ……」

時間も残り少ないし考えも浮かばずに音をあげると燕里が、

「……提案があります」

とさっきとは違った決意の籠もった表情で言う。

俺はその表情が気になったが続きを待った。しかしその続きは恐ろしいものだった。

「第一この事件の発端は護守さんですよ？だったら責任を取って

もらうのが筋だと

思っんです。つまりですね……護守さんを曹操様に売って「ふざけんな!!」

思わず声を荒げて燕里の言葉を遮る。

確かに俺のせいだけどその仕打ちはあんまりだと思っんだが…。

しかもその提案だと最悪俺死ぬ事になるんだけど……それでもいいのかよ…。

しかし燕里は机を叩きながら立ちあがって、

「じゃあどうしろって言っんですか?! 時間も無い! 案も無い! 焼売も無い! こうなったら護守さんを曹操様に突きだして自分の身の安全を確保するしか無いじゃないですか!!」

その言葉に俺も立ちあがって、

「分かった! すぐ考えるからそんな早まった行動はしないでくれ!!」

と懇願してみるが燕里は冷静な声で、

「もう時間も2分くらいしかないんですよ? この状況で思いついたとしても行動する時間なんて無いと思いますよ…」

と言っ言葉を聞きながら考える事にした。

さてどうするか……問題は華琳達の焼売の数を元に戻すにはどうす

るかってことだよな…。

でも作り直す時間は無い………こんな不可能だろ…絶対に思いつかないって…。

…もう燕里に罪全部擦り付けて国外逃亡しちゃおうかな…いや絶対そんなことしないよ？

…そう言えば街にすごくおいしいうって評判のお店が出来たって前に聞いたな…。

まあ金は結構取られるらしいんだけどね………ってそんなことどうでもいいんだよ！

今はどうやって焼売の数増やすかって考えてんだから………ってそう
だ！

今から買いに行けば………無理か…時間がかかりすぎるな。

ああもう！どうすればいいんだよー！

そうこうしている内に燕里が残念そうに、

「………そろそろ配膳の支度をしないといけないので………覚悟決めておいてくださいね」

と最後に不気味な事を言って焼売を5個ずつ蒸籠の中に入れ、3つをカートみたいなのやつに乗つけて、もう1つは別のカートみたいなやつに乗つけた。

その事を不思議に思い質問してみると、

「これは曹操様と夏侯姉妹様用で、こっちは北郷様用です」

この答えを聞いた時に俺の頭にある一つの考えが浮かんた。

この考えなら一瞬で華琳達の焼売の数は7つになるし味も変わらない。

早速この考えを燕里に伝えてみると驚いた後に、

「た、確かにその案なら行けるかもしれないですけど…そんな事して大丈夫なんですか？」

と尤もな意見を言われたがもう議論をしている時間も無いので押し切らせてもらう！

「大丈夫だって…いざって時には俺が責任取るから！」

と真剣な表情で訴える。

…まあ、もしばれても言い包める自信があるから言ってるんだけどね。

5年間も腐れ役人達の仕事やってると嫌でも口が達者になるからな…。

口がうまくないと報酬が貰えなかったり、追加で人殺したり、なんか知らないけどこっちが金を払うことになったり……ああ…思い出しただけで泣けてくるな…。

と昔の事を思い出していると燕里が、

「分かりました…じゃあ早く準備しましょう」

と言って準備を始める。

やがて準備が終わると燕里は、

「じゃあ私は曹操様方の分を運びますから、北郷様の分をお願いしますね」

と言ってお辞儀をした後にカートを押して厨房から出て行った。

前を見てみるとカートがあり、上には蒸籠が乗っていて中からおいしそうな匂いがする。

そのカートの取っ手の部分を握り厨房を出て北郷の部屋に向かう。

その道中、何人かの兵士に遭遇したが皆驚いた後にヒソヒソ話を始めた。

ヒソヒソ話に聞き耳を立ててみると皆、

「まさか徐庶さんが…」とか「また死人が出るのか…」とか「…南無阿弥陀仏…」などと勝手な事を抜かしていた。

そんな話を聞いた時は思わずカートごとぶん投げてやるうかと思っただがギリギリで思いとどまった。そのせいで取っ手の部分にちょうど良い握る場所が出来たけだな。ケツ！

そんな道すがら小さな声で呟いた。

「……………今度からつまみ食いする時はちゃんと許可を取ろう……………」

そんな当り前の事を呟きながら一人北郷の部屋を目指す。

……………今度はちゃんと辿りつけるといいんだけどなあ……………。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9044p/>

真・恋姫†無双 転生万屋さん

2011年10月8日13時44分発行